

タイトル	ホロコーストの子どもたち - スロバキアの事例 -
著者	ヤネツォヴァ, エドゥアルド・ニジニャンスキータマ ラ; 木村, 和範; Janecová, Eduard Niž anský and Tamara; KIMURA, Kazunori
引用	開発論集(117): 125-169
発行日	2026-03-13

ホロコーストの子どもたち

—— スロバキアの事例 ——*

エドゥアルド・ニジニャンスキー** タマラ・ヤネツォヴァ***

木村和範(訳)****

1. はじめに
 2. スロバキアのユダヤ人コミュニティ
 3. 歴史的背景
 4. 準備段階—自治政府時代の反ユダヤ政策—
 5. スロバキア国の建国とユダヤ人コミュニティへの介入
 6. アーリア化と「ユダヤ法」
 7. スロバキアからのユダヤ人の強制移送(1942年)
 8. ユダヤ人労働収容所と子どもたち
 9. 「平穏な年」—1943年~1944年—
 10. スロバキア国民蜂起とユダヤ人
 11. 山岳地帯への逃避
 12. 街なかに隠れて—1944年~1945年—
 13. 1944年から1945年にかけての冬季における強制移送と迫害
 14. 生還
 15. 結論
- 解題

1. はじめに

ホロコーストに関しては、アーリア化で破綻に追い込まれた企業の数、強制移送された人数、殺害された人数など、数多くの研究成果が挙げられている。しかし、その研究で

は、客観的データの欠点を自覚することも大切である。「何層にも積み重ねられたデータの奥深くに、生身の人間とその運命、そして人々の感情が隠されている」⁽¹⁾ からである。家族1人ひとりの運命だけでなく、その家族全体の運命に目配りすることも重要である。

* Eduard Nižňanský and Tamara Janecová, “Children of the Holocaust - the Case of Slovakia,” *Fórum Társadalomtudományi Szemle / Forum Social Sciences Review* (forthcoming in Hungarian). 翻訳出版は、原執筆者の許諾による。()内は原執筆者により、[]は訳者による。

** Eduard Nižňanský スロバキア・コメニウス大学教養学部教授

*** Tamara Janecová スロバキア・トルナヴァ大学文学部専任講師

**** (きむら かずのり) 北海学園大学開発研究所特別研究員, 北海学園大学名誉教授

ホロコーストの外被と運命が似かよっているスロバキアでも例外ではなく、その当時生きていた1人ひとりの反応は個別的であり、体験した事柄への事後の感想もまた独自である。

本研究の目的は、政治の分野における意図主義⁽²⁾の観点から、スロバキアにおける反ユダヤ主義政策とホロコーストの経緯を述べ

(1) Peter Salner. *The Holocaust and Children*. In Monika Vrzgulová. *Children of the Holocaust*. Bratislava 2007, p. 6.

(2) 以下では、特にファシズムやナチズム研究における意図主義と機能主義について言及し、本稿が意図主義を採用する理由を述べる。

意図主義と機能主義は、歴史的因果関係と国家権力の性質に関する2つの相異なる原理に基づいている。意図主義は、歴史的な事件が主に指導者の個人的な意思とイデオロギー的信念によってもたらされるのであって、定立された世界観と国家の政策の最終的実行との間には、直接的な因果の規定関係が存在すると見る。この見解では、政策の方針に関する文書は単なる美辞麗句ではない。将来の行動のための設計図として機能する。

これとは対照的に区別される機能主義は、歴史上の帰結が、あらかじめ定められた計画に基づくのではなく、体制の内的ダイナミクスと体制構造への外的圧力に由来すると見る。これによれば、立案された過激な具体的政策そのものは、関連組織の競合や行政措置の輻輳した混乱の中で定立され、累積した結果であるとする。このために、指導的政治家⁽³⁾の直接的支配を超越した力の囚われ人であるとする。

私見によれば、スロバキアにおけるホロコーストについて、その説明の枠組みをより説得力のあるものとして提供するの意図主義である。反ユダヤ政策が段階的に拡大強化されたことだけでなく、その向かい着いた先と設計された計画の関係性をもよく説明できるからである。その一方で、機能主義に基づけば、縦割り行政による不統一、それに由来する制度的対立によって過激化した政策の累積メカニズムが明らかに

ることである。フリンカ・スロバキア国民党⁽³⁾ (Hlinkova slovenská ľudová strana : HLSL) が領導した反ユダヤ政策は、スロバキアで生

なることもあるであろうが、過激化するプロセスが繰り返されるイデオロギーの軌跡を説明するには、あまり適していない。

これに対して意図主義は、歴史的帰結とイデオロギーとの関係性、そしてイデオロギーの主体性を前面に押し出す。このことによって、政策主体が体制構造への外的圧力に反応したと見るだけでなく、政策主体が自らの目的を実現するためにふさわしい法的・行政的手段を積極的に模索し、それに基づいて過激な行為を行わせた者として、その役割を果たしたと捉えようとする。この意味で、過激化した反ユダヤ主義は外的条件の変化に機に臨み変に応じた官僚力学の、当初は意図しなかった副産物とは見ない。確固たるイデオロギーを持った指導的政治家による意図的な取組みの結果が現象したと考えるのである。

意図主義の問題については以下を参照。Ian Kershaw. *Der NS-Staat*. Hamburg, 1989; Reinhard Kühnl. *Faschismustheorien. Ein Leitfaden*. Heilbron 2014; Mason Timothy. *Intention and Explanation: A Current Controversy about the Interpretation of National Socialism*. In *Der "Führerstaat". Mythos und Realität. Studien zur Struktur und Politik des Dritten Reiches*. Ed. by G. Hirschfeld et al. Stuttgart 1991, pp. 22-41; Eduard Nižňanský. *Interpretácie fašizmu historiografiou SRN/1945-1990/*. (Interpretations of fascism by German historiography/1945-1990/.) Nitra: Vysoká škola pedagogická v Nitre, 1995, pp. 119-37.; Richard Saage. *Faschismustheorien. Eine Einführung*. München 1981; Syring Enrico. *Intentionalisten und Strukturalisten. Von einem noch immer ausstehenden Dialog*. In *Der Schatten der Vergangenheit. Impulse zur Historisierung des Nationalsozialismus*. Ed. by Uwe Backes et al. Frankfurt/Main 1992, pp. 169-194; Mathias Wörsching. *Faschismustheorien. Überblick und Einführung*. Stuttgart, 2020.

(3) フリンカ・スロバキア国民党 (Hlinkova slovenská ľudová strana : HLSL) は、1913年にカトリックの聖職者アンドレイ・フリンカ (Andrej Hlinka) などが創建したスロバキア

まれた固有の反ユダヤ主義と「不倶戴天の敵であるユダヤ人」のイメージ、この2つから生まれたというのが我々の考えである。ホロコーストの歴史分析は、多様な資料に基づくが、資料として使用される多くの公式文書を作成したのは、加害者側である。これらの行政記録の重要性は言うまでもないが、それらは、数量に注目して官僚の視点から詳細に作成されている⁽⁴⁾。それに対して文書の形態に変換された口述証言は、始めから文書の形式

をとって作成された資料には記録されていない定性的なデータ(一次資料)であり、方法論上意義深い補完文書としての役割を果す。換言すれば、歴史の口述は、公的な叙述を補完し、それを補正するものとして機能するのである。加害者側が作成した文書(統計データ)は、行政目的の下僕であり、本質的に被害者を非人間化する^[訳注1]。これに対して生存者の証言は、歴史の記録に主体性と個別具

国民党 (Slovenská ľudová strana : SĽS) を母胎とする。1918年建国の民主的なチェコスロバキア共和国の時代に、国政選挙で3分の1の議席を獲得することはなかったが、1938年10月6日から1939年3月14日までのスロバキア自治政府の時代に、フリンカ・スロバキア国民党の一党独裁体制が作り上げられた。スロバキア国の時代には、スロバキア共和国憲法(1939年7月)によってこの政党は唯一の公認政党となった。第二次世界大戦後、同党の政治活動は禁止された。

(4) ホロコーストの研究史については以下を参照。Ivan Kamenec. Phenomenon of the Holocaust in Historiography, Art and the Conclusion of Slovak Society. In *Holocaust as a Historical and Moral Problem of the Past and the Present*. Ed. By Monika Vrzgulová et al. Bratislava 2008, pp. 311-339; Eduard Nižňanský. Der Holocaust in der Slowakischen Historiographie in der neunzigsten Jahren. In *Bohemia*, Band 44, Heft 2, 2003, pp. 370-388; Eduard Nižňanský - Katarína Bohová. Perception of the Holocaust in Slovak Historiography and Among the General Politic after the Establishment of the Slovak Republic in 1993. In *United in Diversity. Contemporary European Jewry in an interdisciplinary Perspective*. Ed. by Marcela M. Zoufalá et al. Oldenbourg 2023, pp. 7-50 (ニジニャンスキー=ボホヴァ「1993年スロバキア共和国樹立後における歴史学と一般市民によるホロコーストの認識について」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第2号, 2023年9月。); Nina Paulovičová. The Reception of the Holocaust in Post-communist Slovakia. In

Bringing the Dark Past to Light. The Reception of the Holocaust in Post-Communist Europe. Ed. by John-Paul Hlinka et al. Lincoln/London 2013, pp. 549-590; Tomas Sniegón. *Vanished History. The Holocaust in Czech and Slovak Historical Culture*. New York/Oxford 2017; Miroslav Szabó. Zwischen Geschichtswissenschaft und Wissenschaft. Der Holocaust in der slowakischen Historiographie nach 1999. In *Einsicht*, 11, 2014, pp. 16-23.

[訳注1] 筆者は、「15. 結論」の冒頭で、本稿の目的の1つが、「公式文書や統計では捉えにくいホロコーストの人間的な側面を浮き彫りにすること」であると述べている。ここで想起されるのは、「1人の死は悲劇だが、100万人の死はもはや統計である。」

「100人の死はカタストロフだが、500万人の死者は統計だ。」という言説である。「統計にすぎない」とされる死者の数や文章そのものについてはバリエーションがあるが、スターリンもしくはアイヒマンの言説と言われている。しかし、河野充義によれば、2人ともかの言説の主ではない。そして、『西部戦線異状なし』の著者レマルクの長編小説(『黒いオペリスク』)に、「でも確かにそうですね、一つだけならいつでも死だが、二百万となると常に統計なのだから。」

(Aber das ist wohl so, weil ein einzelner immer der Tod ist — und zwei Millionen immer nur eine Statistik.) という文言があり、さらに出典は不明だが、フランスのある外交官が、1925年に、「戦争? さほど恐ろしいものとは思えませんね! 確かに一人の死はカタストロフです。しかし数十万の死となると統計ですよ!」と言っているとのことである。以下を参照。河野充義「悲劇と統計

体性という魂を吹き込んでくれる。個人の証言は、小さな歴史を提供し、スロバキアで暴虐の限りを尽くした反ユダヤ主義立法の影響を被った生活の実態に光を当ててくれる。個人の証言がなければ、社会の仕組み、社会への適応メカニズム、個人の経験などが見失われてしまうが、証言のおかげでそれらを再構成できるようになるのである。すべてのユダヤ系市民は、1人ひとりが唯一無二の体験をした。その人が生き延びて証言すれば、その体験はホロコーストを反省するときに、生かされるようになる。これは、ホロコーストを生き延びたユダヤ人の子どもたちにも当てはまる。

ローレンス・ランガー著『ホロコーストの証言——記憶の廃墟——』（1991年）は、ホロコースト生存者の証言を分析し理解するときの有用な理論的枠組を提供している。ランガーは、生存者の物語の中から単純で気休めの「救済の力（redemptive power）」や「人間の不屈さ（unbreakable human spirit）」を、無理に見付け出そうとしてはならないと考えている^{〔訳注2〕}。そのような姿勢は、証言に内在する痛ましく複雑な心情や内部矛盾に対す

—スターリンは本当にそんなことを言ったのか？—『現代文芸論研究室論集』2010年、東京大学機関リポジトリ、https://www.bing.com/search?q=%E6%B2%B3%E9%87%E5%85%85%E7%BE%A9+%E7%B5%B1%E8%A8%88+%E6%82%B2%E5%8A%87&cid=118fe44c874041139751fb57f52a57ba&gs_lcrp=EgRlZGdlKgYIABBFgDkyBggAEEUYOdIBCTI5MzgyajBqNKgCCLACAQ&FORM=NAB01&PC=HCTS, accessed on Dec. 1, 2025.

^{〔訳注2〕}この著書でランガーは、生存者の口頭証言の一般的傾向として、苦悩の中にあってもなお希望を見出そうとしたこと、さらに強靱な精神力で苦難を克服した英雄的な物語

る配慮が足りないというわけである。ランガーのこの指摘は、本稿に取り上げた証言についても当てはまる。ランガーは、「救済の力とか不屈の精神を探し求める代わりに、」様々な証言から表出する様々な記憶を、(1) [個人に固有の] 深層の記憶（Deep memory）と [境遇が類似した諸個人の] 共通の記憶（Common memory）、(2) 苦悩の記憶（Anguished memory）、(3) 屈辱の記憶（Humiliated memory）、(4) 恥ずべき記憶（Unheroic memory）[後には「汚れた記憶（Tainted Memory）」とも] の4つに類型化した。そして、それぞれの物語を分析するときのモデルを提案した。

[個人に固有の] 深層の記憶は、迫害を受けていた時代の「埋もれた自己（buried self）」についての記憶であり、そのものとしては記憶された知識（intellectual memory）ではない。痛み、飢え、不潔、そして至る所で感ずる苦痛の感覚についての記憶である。そのほとんどは肉体が記憶しているが、断片的で、物語としての一貫性がない。深層の記憶は、共通の記憶と密接に結びついているが、これに対して共通の記憶は、過去のできごとを時間的経過の順に整理し説明しようとするときに、記憶された「知識」（an “intellectual” memory）としての機能を果たし、トラウマに

としがちであることを指摘し、それらは迫害を美化することに繋がるとして批判した。証言に触れる者は、それを理解すべく努力するとともに、100%は理解できないという謙虚な姿勢を保持してホロコーストの証言に向き合うべきと主張した。Cf. “Lawrence L. Langer (1929-),” Website of the Jewish Virtual Library, <https://www.jewishvirtuallibrary.org/langer-lawrence-l>, accessed on Aug. 25, 2025.

よって見た目は引きちぎられたバラバラの記憶を連続するものとして再構築する。生存者は、[深層の記憶を持つ証言者と共通の記憶を持つ証言者という]「二重の存在」であって、生存者は自己の記憶の中で[2つの記憶を持つ]「2つのアイデンティティ」と向き合う。これら2つはつねに絡み合っている。物語の流れが乱れて証言が矛盾するのは、このためである⁽⁵⁾。本稿における生存者の証言には、このような二重性が見られる。それは、話者が子どもだったからでもある。このことは重要である。証言の中では、第一に子どものときにどう見ていたかということ、第二に今 おとな になった自分がそれをどのように記憶しているかということ、この2つが輻輳している。この2つの絡み合いは、「子どもとしての個人が記憶していることや戦後になってから聞いたことを用いたり、あるいは戦後に想像して作り上げたジグソーパズルのピースをはめ込んだりして、自己の生涯の物語を構築する過程」⁽⁶⁾で前面に出てくる。分がちがたい二重の視点が証言の中に侵入せざるを得ないのは、こういう事情があるからである。

苦悩の記憶 (Anguished memory)⁽⁷⁾ と言われる記憶は、現在の自我と過去の自我に分裂した自我の記憶である。この分裂に関するランガーの説明によれば、生存者のアイデンティティを形作るのは、本人の経験した事柄

(生きた出来事) だけではない。その人の中にはなかったことにされてしまう事柄 (死滅した出来事 (died event)) によっても形作られる。ここに、「死滅した出来事」とは、破壊された家族、コミュニティ、世界などで実際に起った出来事が、心の中では死滅し存在しなくなってしまった出来事のことである。

以上の記憶とは別に、屈辱の記憶⁽⁸⁾ (Humiliated Memory) と言われる記憶がある。極限状況に置かれると (in extreme situations), 個人のアイデンティティは肉体へと還元される^(執筆者補注1)。屈辱の記憶では、このことがポイントである。肉体が攻撃されれば、それは肉体に苦痛を与えるだけではない。人間の形而上学的な本質 [精神性] と尊厳が直接攻撃されるのである。したがって、屈辱の記憶とは、主として身体的脆弱性と無力感についての記憶である。さらにランガーは、この記憶の層の上に、生存のために被害者が道徳的に見るといかにとも言い難い不快な行為を強制されたことについての「汚れた記憶」を積みたした記憶をもつアイデンティティのことを「急ごしらえの自我 (improptu self)」^(執筆者補注2)

⁽⁸⁾ *Op. cit.*, pp. 77-120.

^(執筆者補注1) 換言すれば、苦痛を受けた肉体が個人のアイデンティティを支配するということ。

^(執筆者補注2) 「急ごしらえの自我」とは、極限状況に適応するために、思考、感情、行動を急いでその場に合わせようとする自我の謂。その自我が、かかる思考、感情、行動をとる機能を果たすアイデンティティとして発現するという意味で、そのアイデンティティは「機能的アイデンティティ (a functional identity)」である。その特徴は、既存の道徳的価値観や社会的性格からの自発的離脱である。衝動や行動が、倫理的選択や合理的正当化に基づくのではなく、自己の生存にとっての必要性だけに基づいて決定される。緊迫した脅威に間髪をおかずに対

⁽⁵⁾ Lawrence L. Langer. *Holocaust Testimonies. The Ruins of Memory*. Yale University Press: New Haven, Connecticut, U.S., and London, 1991, (hereafter Langer (1991),) pp. 1-38.

⁽⁶⁾ Monika Vrzgulová. *Children of the Holocaust*. Bratislava 2007, p. 29.

⁽⁷⁾ Langer (1991), pp. 39-76.

と名づけている。これは、規則のない極限状況に即応して生じ行動したアイデンティティである。このように、屈辱の記憶とは、「証言者自身の現在の道徳感情によって非難されたり、わずかでもそのような行為をしたことがその人の汚点となったりする記憶」である⁽⁹⁾。生き残ったことを苦痛に感ずるようになるのは、このような記憶があるからである。

[4番目の記憶（「恥ずべき記憶」）については、「13. 1944年から1945年にかけての冬季における強制移送と迫害」で言及されている。]

ホロコーストは、[証言者の]アイデンティティを別物に作り変える。それのみならず、その人間の記憶の構造そのものを原状回復が不可能なまでに変容させる。こうして、それまでに培われてきた道徳では説明できず、言葉でも表すことのできない「分裂した自我」[自我やアイデンティティに統一性を欠く証言者]が誕生する。

ホロコーストと子どもに関する問題に特化した専門図書は、スロバキアでは1冊しかない。それを執筆したのは、民族誌学者モニカ・ヴルズグロヴァ⁽¹⁰⁾ (Monika Vrzgulová)^[訳注3]である。ホロコースト禍に晒された子どもたち

応するためである。その結果、生存者の現在の統合された自我 (integrated self) (思考、感情、行動をそのうちに統一させた自我)の観点からは、過去の思考、感情、行動を事後的にはどうしても承服できなかつたり、恥ずべきものと感じたりすることが多い。

⁽⁹⁾ *Op. cit.*, p. 122.

⁽¹⁰⁾ Monika Vrzgulová. *Children of the Holocaust*. Bratislava 2007.

^[訳注3] モニカ・ヴルズグロヴァはスロバキア科学アカデミー民族学・社会人類学研究所 (Ústav etnológie a sociálnej antropológie Slovenskej akadémie vied : ÚESA SAV) の研究員。

の運命を考察するに当たって、本稿ではミラン・シメチカ財団^[訳注4] (ブラチスラバ) が所蔵するオーラルヒストリー・データベースを活用するが、これまで我々は、特にスロバキアとイスラエルで独自の調査を実施してきた。本稿で取り上げた証言は、多様な経験を網羅することを原則として入手可能な資料の中から選定された。その際、選ばれた物語がスロバキアの様々な地域を網羅しているだけでなく、危険から逃れるための潜伏、国内の労働収容所への収監、ナチス強制収容所への移送、スロバキア国民蜂起への参加など、様々な戦時中の出来事に触れた物語を収録しよう心がけた。さはさりながら、証言には本質的な限界があることは認識しておく必要がある。1つひとつの物語は統計の意味での代表性があるとは言い難く、生存者が証言するときの意思や語る能力に影響されることもありうるからである。したがって、本研究では、1人ひとりが語るマイクロヒストリーを代表標本と見るのではなく、数多くの個々の経

^[訳注4] ミラン・シメチカ財団 (Nadácia Milana Šimečku : NMS) については、以下を参照。

ミラン・シメチカ財団は、チェコスロバキア共産主義体制の崩壊後に設置されたスロバキア最古のNGOの1つである。ピロード革命を領導した人々によって設立されたこの組織の名称は、哲学者で著述家にして反体制派のミラン・シメチカ (1990年没) にちなんでいる。現在、ミラン・シメチカ財団は、マイノリティの様々なグループの権利に焦点を定めて、寛容、民族間と異文化間への対話、共存を推進している。 (“Milan Šimečka Foundation - NMS,” Website of the Human Rights Guide: *Human rights and citizenship education*, <https://www.humanrightsguide.sk/en/themes/organisations-that-can-help-you/non-governmental-organisations/milan-simecka-foundation-nms>, accessed on Aug. 29, 2025.)



地図（スロバキア）

（注）本稿に関連する主要都市のみを記入した。国境線は第一次ウィーン裁定（1938年11月）後に確定した。

験が織りなす^{あて}艶やかなタペストリーの断片であり、それが総体となる^{あて}とき歴史の全体像を明らかにしてくれるものと見ている。

2. スロバキアのユダヤ人コミュニティ

1930年人口センサスによれば、スロバキアには13万6737人のユダヤ人が居住していた（総人口の4.11%）。ユダヤ人は全2638市町村のうち1435市町村に居住していた。最大のユダヤ人コミュニティは、ブラチスラバ（約1万5000人）、ニトラ（4358人）、プレシヨフ（4308人）、ミハロフツェ（3955人）、ジリナ（2917人）にあった⁽¹¹⁾。リヴィ

⁽¹¹⁾ Katarína Hradská. Die Lage der Juden in der Slowakei. In *Judenamanzipation - Antisemitismus - Verfolgung in Deutschland, Österreich-Ungarn, den Böhmisches Ländern und in der Slowakei*. Ed. Jörg K. Hoensch Stanislav Biman, Lubomír Lipták. Essen: Klartext, 1999, p. 155.

ア・ロートキルヘンによれば、当時スロバキアにはユダヤ教の宗教コミュニティが167あり、その内訳は、正統派107、改革派29、現状維持派31である⁽¹²⁾。第一次ウィーン裁定（1938年11月2日）後のハンガリー軍によるスロバキア南部の一部占領により、スロバキアに残ったユダヤ人は、8万9000人である。

特にスロバキア西部には、中産階級の典型とも言うべきユダヤ人が住んでいた。これに対して、スロバキア東部のユダヤ人は村落に居住する農民である。1930年の統計による職業分布では、ユダヤ人の約49.5%が商業・サービス業に従事し、公的部門には3万151人のユダヤ人が就業していた。スロバキアの弁護士の約50%はユダヤ系である⁽¹³⁾。医師

⁽¹²⁾ Livia Rothkirchen. The Situation of the Jews in Slovakia between 1939 and 1945. In *Yearbook for Anti-Semitism Research* 7, 1998, p. 50. (hereafter Rothkirchen.)

会のデータ（1939年）によれば、医師数は1414人に増えて、その中の43.9%がユダヤ系である。薬剤師や獣医師についても同様である⁽¹⁴⁾。

3. 歴史的背景

ここでは、スロバキア国の誕生とそれ以降の経過を簡単に述べる⁽¹⁵⁾。ミュンヘン協定（1938年9月29日）は、チェコスロバキア第一共和国の外交政策に重大な変化をもたらした。しかしそれだけでなく、それを機にチェコスロバキアの内政も大きく変容した。チェコスロバキアの民主主義と中央政府を弱体化させたフリンカ・スロバキア国民党は、1938年10月6日、ジリナにおいてスロバキアの自治宣言⁽¹⁶⁾を发出するまでに成長した。「1つの祖国、1つの党、ただ1人の指導者（総統）（Vodca, Führer, Leader）を戴き、祖国への奉仕に団結して前進する。」⁽¹⁷⁾を党是

とした、急ごしらえのフリンカ・スロバキア国民党による一党独裁体制が出来上がり、他の政党を解党に追い込んだ。そのスピードはナチス・ドイツの比ではない。[フリンカ・スロバキア国民党の準軍事組織] フリンカ警固隊⁽¹⁸⁾が公認され、フリンカ・スロバキア国民党が推薦する候補だけの「選挙」では、統制の効果を上げるために、異民族やマイノリティの投票所を別に設ける方式が採用された。選挙の結果は、当選した議員63人のうちフリンカ・スロバキア国民党の党員が50

1933/34 in Deutschland. In *Geteilt, besetzt, beherrscht: Die Tschechoslowakei 1938-1945: Reichsgau Sudetenland, Protektorat Böhmen und Mähren, Slowakei (Veröffentlichungen zur Kultur und Geschichte im östlichen Europa)*. Ed. Monika Glettler, Lubomír Lipták, Alena Mišková. Essen: Klartext, 2004, pp. 249-287.

⁽¹⁸⁾ フリンカ警固隊（1938年～1945年）は、カトリック司祭アンドレイ・フリンカ（Andrej Hlinka）[1864年～1938年]の名をとったフリンカ・スロバキア国民党の準軍事組織である。スロバキア国民の精神と肉体を抑圧し、ユダヤ人の強制移送（1942年）などの反ユダヤ作戦を組織し、スロバキア国内に設置されたユダヤ人労働収容所で警備に当たった。1944年から1945年にかけて、フリンカ警固隊非常時師団は、スロバキアに派遣されたドイツの特別分遣隊第H部隊を支援して、抵抗運動を弾圧し、兵士、パルチザン、ユダヤ人、ロマの人々を迫害した。[これについては以下を参照。Ján Stanislav and Stanislav Mičev, *The Anti-Jewish Reprisals in the Slovakia from September 1944 to April 1945*. In Dezider Tóth, (ed.) *The Tragedy of Slovak Jews*, Banská Bystrica, Slovakia: Museum of the Slovak National Uprising, 1992. (ヤーン・スタニスラフ、スタニスラフ・ミチェフ「スロバキアにおける反ユダヤ主義者の報復（1944年9月～1945年4月）」『スロバキアのホロコースト—悲劇の諸相—』（トート編 木村和範訳）（『経済論集』（北海学園大学）第73巻第3号、2026年3月所収。）]

⁽¹³⁾ See *Národné noviny*, (National Newspaper), 8 November 1938, p. 2; Rothkirchen, p. 50.

⁽¹⁴⁾ See Jozef Suláček. *Biele plášte: Tragické osudy židovských lekárov na Slovensku v období 2. svetovej vojny*. (White Coats: The Tragic Fate of Jewish Doctors in Slovakia during World War II.) Bratislava 2005.

⁽¹⁵⁾ 1939年7月21日に採択された憲法により、この国は正式にスロバキア共和国と称され、この名称はとりわけ公的文書で使用された。スロバキアの政治家や印刷媒体は、これを一般的にスロバキア国と呼称した。

⁽¹⁶⁾ これによってスロバキア自治領（正式名称「スロバキア自治州」）が誕生し、その存在期間は、1938年10月6日から1939年3月14日までである。

⁽¹⁷⁾ See Eduard Nižňanský, *Die Machtübernahme von Hlinkas Slowakischer Volkspartei in der Slowakei im Jahre 1938/39 mit einem Vergleich zur nationalsozialistischen Machtergreifung*

人であった（そのうちカトリック司祭は13人）。首相兼フリンカ警固隊総司令官兼総統には、カトリック司祭ヨゼフ・ティソ⁽¹⁹⁾が就任した。ティソは1939年〔独立〕から1945年〔終戦〕までスロバキア共和国大統領を務めた。カトリックの聖職者の多くは、県・郡・市町の党支部長としてフリンカ・スロバキア国民党の役職者に登用された。このために、当時のことを「聖職者ファシズム

(clerical fascism, clero-fascism)」と言う歴史学者もいる⁽²⁰⁾。

1939年3月、ナチス・ドイツは中欧における地政学的優位性を見抜き、チェコスロバキア第二共和国（1938年～1939年）^{〔訳注5〕}への介入を決定した。その結果、〔1939年3月14日には〕スロバキア国が建国され、〔翌15日には〕ボヘミアとモラヴィアが占領され、ドイツの保護領となった⁽²¹⁾。

国家の土台としての一党独裁制が、その後のあり方のすべてを決定づけた。〔1939年3月〕スロバキア共和国は、ナチス・ドイツと「保護条約」^{〔訳注6〕}を締結して、ナチス・ドイ

⁽¹⁹⁾ Jozef Tiso (1887年～1947年)は、ローマ・カトリック司祭、スロバキアの政治家。1938年10月6日～1939年3月14日、スロバキア自治州〔自治政府〕首相。1939年3月14日～1939年10月26日、スロバキア共和国首相。1939年～1945年、スロバキア共和国大統領。1938年～1945年、フリンカ・スロバキア国民党（ナチス占領下で唯一合法の政党）党首。1942年以降、ティソは“Vodca（総統）”の称号を与えられた（これはナチス・ドイツの「総統（Führer）」に当たる）。ティソは民主主義の息の根を止め、「唯一の神、1つの民族、党も1つ」のスローガンが象徴する全体主義的な聖職者ファシスト体制に置き換えた。ティソは第二次世界大戦中にナチス・ドイツと協力し、戦後、死刑判決を受けた。See Ivan Kamenec. *Jozef Tiso. Tragédia politika, kňaza a človeka* (Jozef Tiso. The Tragedy of a Politician, Priest and Man). Bratislava 2013; Eduard Nižňanský. Die Vorstellungen Jozef Tisos über Religion, Volk und Staat und ihre Folgen für seine Politik während des Zweiten Weltkrieges, In *Religion und Nation: Tschechen, Deutsche und Slowaken im 20. Jahrhundert*. Ed. Kristina Kaiserova, Eduard Niznansky, Martin Schulze Wessel. Essen: Klartext, 2015, pp. 39–83; Eduard Nižňanský. Anti-Semitic Policies of Jozef Tiso during the War and before the National Court. In *Policy of Anti-Semitism and Holocaust in Post-War Retribution Trials in European States*. Ed. Stanislav Micev, Katarína Ristveyová. Banská Bystrica: Museum of Slovak National Uprising, 2019, pp. 113–148; James Mace Ward. *Priest, Politician, Collaborator: Jozef Tiso and the Making of Fascist Slovakia*. Ithaca and London Cornell University Press 2013.

⁽²⁰⁾ Miloslav Szabo. “Clerical Facism”? Catholicism and the Far-Right in the Central European Context (1918–1945). In *Historický časopis*, 67 (2018), pp. 385–412; ditto. *Klérofašisti. Slovenskí kňazi a pokušenie radikálnej politiky (1935–1945)* (Clerofascists. Slovak priests and the temptation of radical politics (1935–1945)). Bratislava: Slovart, 2019.

^{〔訳注5〕} 1938年10月6日に自治宣言が発せられ、スロバキア地域を自治州とした。これによって、チェコスロバキア共和国は「連邦制」国家となった。それ以前を第一共和国と言うのに対して、第二共和国と言う。この共和国も、1939年3月14日にスロバキア自治州がスロバキア国として独立し、その翌日には「チェコスロバキアの残りの部分」と蔑称されていたボヘミアとモラヴィアがドイツの保護領となり、崩壊した。

⁽²¹⁾ See Ivan Kamenec. *Slovenský štát*. (Slovak state.) Praha: Anomal, 1992; Katarína Hradská - Ivan Kamenec et al. *Slovenská republika 1939–1945*. (Slovak Republic 1939–1945.) Bratislava: Veda, 2015.

^{〔訳注6〕} 保護条約の正式名称は「ドイツ帝国とスロバキア国の間の保護関係に関する条約 (Zmluva o ochrannom vzťahu medzi Nemeckou ríšou a Slovenským štátom (A Treaty on Protective Relations between the German Reich and the Slovak State))」。ドイツ帝国とスロバキア国との間で、ウィーン（1939年3月18日）

ツの従属国になり、スロバキア領へのドイツ軍の駐留を承諾するとともに、外交と軍事はドイツとの間で調整することになった⁽²²⁾。スロバキア共和国は、ポーランド侵攻とソ連侵攻を企てたナチス・ドイツの側に立ち、親独の姿勢は世界大戦の終結まで貫かれた。フリンカ・スロバキア国民党に与する政治家たちは、ナチス・ドイツが戦争に勝利することによってのみ、政治生命と国の舵取りが保証されると固く信じていた。こうして、アメリカ合衆国、イギリス、ソビエト連邦はスロバキア共和国の敵国と目されるようになった。

4. 準備段階—自治政府時代の反ユダヤ政策—

スロバキア自治政府時代（1938年10月6日～1939年3月14日）に、政権党であるフリンカ・スロバキア国民党は、内なる反ユダ

とベルリン（1939年3月23日）で調印され、スロバキアはドイツの衛星国になった。ドイツ側は、外務大臣ヨアヒム・フォン・リッベントロップが、またスロバキア側は、大統領ヨゼフ・ティソ、首相ヴォイテフ・トゥカ、外務大臣フェルディナンド・ドゥルチャンスキーが署名した。「保護条約」については以下を参照。“Treaty between Germany and Slovakia, with Germany assuming military control as protector”, Website of the Harvard Law School Library Nuremberg Trials Project, <https://nuremberg.law.harvard.edu/documents/696-treaty-between-germany-and-slovakia?mode=text>, accessed on June 26, 2025.

⁽²²⁾ Slowakisch-deutsche Beziehungen 1938-1941. In *Dokumenten I. Von München bis zum Krieg gegen die UdSSR*. (Treaty on the Protective Relationship between the German Reich and the Slovak State - 18 March Vienna, 23 March Berlin.) Eds. Eduard Nižňanský et al., Prešov 2009, p. 304-309.

ヤ主義を制度化して、反ユダヤ政策の基盤にした。当時、フリンカ・スロバキア国民党は、「穏健派」(ヨゼフ・ティソ)と「急進派」(ヴォイテフ・トゥカ⁽²³⁾、アレクサンデル・マッハ⁽²⁴⁾)の2派に分かれ、「ユダヤ人問題の解決」についても、この2派が抗争していた。ヨゼフ・ティソに代表される「穏健派」の力点は、経済分野からユダヤ人を排除することに置かれ、ユダヤ人の経済分野への参入率を4%以下に抑えようとした(これは「人数制限 (numerus clausus)」政策と言われる)。ただし、反ユダヤ政策が激化してユダヤ人が1942年に強制移送されることになったとき、「穏健派」は、それに対して異議を唱えず抗議することもなかった⁽²⁵⁾。

⁽²³⁾ Vojtech “Béla” Tuka (1880年～1946年)はフリンカ・スロバキア国民党「急進派」の政治家。首相(1939年～1944年)、外務大臣(1940年～1944年)を務めたナチス・ドイツの協力者。トゥカは、ドイツ占領下のポーランドにあるナチス強制収容所へとスロバキア・ユダヤ人を強制移送したときの首魁の1人である。第二次世界大戦後、処刑。

⁽²⁴⁾ Alexander Mach (1902年～1980年)。1938年～1939年、スロバキア政治宣伝局長。1938年～1945年、スロバキア国務院議員。フリンカ警固隊の重要人物(1939年～1944年、最高司令官。フリンカ・スロバキア国民党の準軍事組織であるこの警護団は、「スロバキアの敵」に対する暴力作戦に当たった)。1940年7月、内務大臣を兼任し、スロバキア国内にユダヤ人労働収容所の設置を主導。1942年のユダヤ人強制移送の責任者[強制移送の企画立案、実行を差配した内務省第14局長アントン・ヴァシエクの直属上司]。第二次世界大戦後、30年の禁固刑。See Anton Hruboň. *Alexander Mach. Radikál z povolania*. (Alexander Mach. The Radical by Profession.) Bratislava: Premedia, 2018.

⁽²⁵⁾ See Ivan Kamenec. *On the Trial of Tragedy. The Holocaust in Slovakia*. Bratislava: H&H, 2007,

第一次ウィーン裁定⁽²⁶⁾によってスロバキア〔南部〕の領土を喪失したことを受けて、自治政府による主要な反ユダヤ作戦が、初めて実行されたのは1938年11月のことである。政府がスケープゴートを必要としたからであった。領土喪失の責任はユダヤ人にあるとして、約7500人を新たに引かれた国境線の外へと追放した。これに対してハンガリー側は、ユダヤ人の受入れを拒否した。このために、追放されたユダヤ人は「無人地帯」^{ノーマンズランド}に仮設した収容所に収容された⁽²⁷⁾。このときは、最終的にはその多くが帰国を遂げた。しかし、この出来事は新政権には強制移送を政治的手段にする用意があることを示した。このような政策がとられたために、後になると、様々な分野で実行された反民主的措置と相まって、ユダヤ人コミュニティのユダヤ人は「二級市民」^{おとし}に貶められ国家による迫害の対象になった。

5. スロバキア国の建国とユダヤ人コミュニティへの介入

[1939年3月14日の] 独立直後 (1939年

pp. 33-65.

⁽²⁶⁾ 第一次ウィーン裁定によって割譲した領土は1万423km²で、それに伴って人口が85万9885人減少した。その内訳は、スロバキア人27万6287人、ハンガリー人50万5508人、ユダヤ人2万6181人などである。See Jörg K. Hoensch. *Der Ungarische Revisionismus und die Zerschlagung der Tschechoslowakei*. Tübingen: Mohr 1967, p. 189.

⁽²⁷⁾ Eduard Nižňanský. Die Deportationen der Juden in der Zeit der autonomen Slowakei im November 1938. In *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 7, 1998, pp. 20-45.

⁽²⁸⁾ See Slovenský zákonník 1939, nar. 63/1939 Sl. z.

3月)に、スロバキア国は「ユダヤ人」を定義し [1939年政令第63号]、それに基づいて初めてユダヤ人の財産権や職業活動を侵害する立法措置が採られることになった⁽²⁸⁾。多くのユダヤ人家族は絶望的な経済的窮地に置かれ、家族の生命を維持するため、愛国心やスロバキア国家への忠誠を誓うこと、キリスト教に改宗していること、貧困状態にあることなどを書き添えて、屈辱的な免除申請書や嘆願書を執筆せざるを得ないところにまで追い込まれた。スロバキア人でもなくキリスト教徒でもないユダヤ人がスロバキア人を搾取しているという反ユダヤ主義の考えかたが、当時は広がり、ユダヤ人はそれへの対応に追われていた。1907年生まれのA.R. (モチェノク在住の薬剤師、1935年と1938年生まれの2人の息子の父)は、1939年7月4日に次のような申請書を提出した。

(Slovak Law Code 1939, Government decree 63/1939 Coll.). ユダヤ教を信仰するすべての者 (1918年10月30日以前に洗礼を受けた者を除く)、ユダヤ教徒の両親を持つ無宗教の者、およびこれらすべての者の子孫を「ユダヤ人」と定義した1939年政令第63号における規定は、1939年法務省内務省共同省令第102号 (1939年4月26日制定) によってさらに詳細に定められた。また、1940年法律第113号に基づいて、企業および商取引がアーリア化され、1940年法律第46号に基づき、ユダヤ人所有地に対するアーリア化も始まった。[1941年政令第198号 (いわゆるユダヤ法) (訳注9参照) では、信仰と関係なく、3人の祖父母がユダヤ人である者を「ユダヤ人」(第1条)、1人~2人の祖父母がユダヤ人である者を「混血ユダヤ人」(第2条)と定義した。この定義は、信仰告白によるものではなく、血統によるものであり、1939年よりも適用範囲が広がった。]

私には未成年の子どもが2人います。この子どもたちをしっかりと育て上げたいと考えています。私は、家族全員を養おうとあるだけの力を尽くし、2年前にローンを組んで薬局を購入しました。しかし、まだ完済はできていません。薬局の所有権を失うことになれば、私は無一文となり、債務返済の目処が立ちません。私は、スロバキア共和国の市民として模範的であり続けたいと固く決意しています。スロバキア共和国の良民にして、国のすべての法律を完全に尊重する市民である私に、免除のご裁可を賜りますよう大統領閣下に謹んでお願い申し上げる次第です。⁽²⁹⁾

1940年までに、ユダヤ人所有の企業と土地を非ユダヤ人に移転する「アーリア化」を開始する新法が制定された⁽³⁰⁾。この時期になると、フリンカ・スロバキア国民党内では、「穏健派」[大統領ヨゼフ・ティソなど]と「急進派」[首相ヴォイテフ・トゥカ、内務大臣アレクサンデル・マツハなど]の路線

の違いが目立つようになった[脚注19, 23, 24参照]。急進派はいつそう多くの政治権力を掌握しようとして、ナチス・ドイツに対しスロバキア共和国の統治者にふさわしいことを示そうとした。「ユダヤ人問題の解決」もまた、両派の間の論点の1つとして浮上した。「急進派」は、「穏健派」の措置よりもはるかに迅速かつ根本からこの「問題」を解決できる、やってみせると主張した。党内に現れた「急進派」のこの動きは、政府機関の奥深くに留めおき、国民の目から遠ざけてしま

1942. (The position of the Central Economic Office in the political, economic, and social life of Slovakia in 1940–1942.) In *Arizácie*. (Aryanization.) Ed. Eduard Nižňanský - Ján Hlavinka. Bratislava 2010, pp. 11–65; Ján Hlavinka. Arizačný proces ako súčasť “riešenia židovskej otázky” na Slovensku. (The Aryanization Process as Part of the “Solution to the Jewish Question” in Slovakia.) In *Acta Judaica Slovaca*, 2008, pp. 21–38; Ján Hlavinka - Martina Fiamová. Arizácia židovského majetku. (Aryanization of Jewish property.) In Martina Fiamová et al. *Slovenský štát 1939–1945. Predstavy a realita*. (The Slovak State 1939–1945. Ideas and Reality.) Bratislava 2014, pp. 255–272; Ed. Eduard Nižňanský - Eudovít Hallon - Ján Hlavinka. *Ústredný hospodársky úrad (Holokaust na Slovensku)*. (Central Economic Office (The Holocaust in Slovakia).) Bratislava 2010; Eduard Nižňanský - Ján Hlavinka. *Arizácie*. Bratislava 2010; Eduard Nižňanský - Ján Hlavinka. *Arizácie v regiónoch Slovenska*. (Aryanization in the regions of Slovakia.) Bratislava 2010; Eduard Nižňanský. The “Aryanisation” of Jewish Property in the Slovak Republic. In *Property Regimes and Property Conflicts in the 20th Century: Germany and Czechoslovakia in an International Context*, Edited by Dieter Grosewinkel et al. Essen 2018, pp. 373–412; Eduard Nižňanský. Expropriation and Deportation of Jews in Slovakia. In *Facing the Nazi genocide: non-Jews and Jews in Europe*, Berlin 2004, pp. 205–230.

⁽²⁹⁾ Slovak National Archive (Slovenský národný archív), fund Office of Prime Minister (Úrad predsedníctva vlády), box 25, number č. 6710.

⁽³⁰⁾ アーリア化の問題については以下を参照。Jean-Marc Dreyfus - Eduard Nižňanský. Jews and No-Jews in the Aryanization process: Comparison of France and the Slovak State. 1939–45. In *Facing the Catastrophe. Jews and Non-Jews in Europe during World War II*. Ed. Beate Kosmala et al. Oxford 2011, pp. 13–40; Hallon Eudovít. Arizácia na Slovensku 1939–1945. In *Acta Oeconomica Pragensia* 7, Nr. 7, pp. 145–160; Eudovít Hallon - Ján Hlavinka - Eduard Nižňanský. Pozícia Ústredného hospodárskeho úradu v politickom, hospodárskom a spoločenskom živote Slovenska v rokoch 1940–

えるような代物^{しろもの}ではなかった。街頭には威圧的行動と敵意の空気となってすぐに現れ、ユダヤ人家族やその子どもたちの日常生活や安全に直接的な影響を与えたのである。

正確な時期を特定できない証言もあるが、ユダヤ人コミュニティに対してあらゆる種類の暴力行為があったことが確認できる。ブラチスラバ出身の少年 F. F. (1932 年生まれ) による以下の証言は日付不明の情報を伝えるが、おそらくスロバキア自治政府時代 (スロバキア国の独立以前) [1938 年 10 月 6 日～1939 年 3 月 13 日] の出来事と考えられる。

昼と言わず夜と言わず、いつでも私たちの周りには [ユダヤの] 星 [が描かれ、それ] で埋め尽くされた。そこにはこう書かれていたのを覚えている。「ユダヤ人はくさい」「ユダヤ人は出てゆけ」などといった類の落書きだ。当時はよく理解できなかったが、両親の話からその意味を推測した。…… フリンカ警固隊 [フリンカ・スロバキア国民党の準軍事組織] が昼夜を問わず通りを行進し、「チェコ人は歩いてプラハへ帰れ。」と叫んでいたのも覚えている。そして、ユダヤ人はパレスチナへ、とも⁽³¹⁾。

一方では当然ながら、こうした出来事をまったく知らなかったユダヤ人の子どももいる。ユダヤ人の少年 I. K. (1938 年生まれ) は両親と兄と共にヤノヴァ・ヴェシユ [ニト

ラの北東約 40^{km}] の小さな村に住んでおり、村では唯一のユダヤ人家族であった。I. K. はこう語っている。

法律や規則、そして一般にどのような法令についても、私はまったく何も言うことができない。なぜなら、私の理性だけでなく、感性でも理解できなかったからである⁽³²⁾

1940 年にナチス・ドイツは西ヨーロッパで勝利を取めた。その後、ヒトラーはハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、スロバキアの要人を別々に召集し、それらの国々を従属国にする構想を明確に説明した^[訳注 7]。ナチス・ドイツの力を後ろ盾としたフリンカ・スロバキア国民党「急進派」は、政府内だけでなく、フリンカ警固隊の中でも自らの地位を固めた。内務省 ([内務大臣] アレクサンデル・マッハ) は一連の差別的法令を施行した。ユダヤ系市民は、ホテル営業免許、酒類販売免許、狩猟免許、漁業免許、銃砲等所持免許を剥奪されたほか、パスポートや運転免許が取上げられ、ラジオ、カメラの所有権を

⁽³²⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony I. K. /Bratislava 2025/; Archive Oral history, Foundation Milana Šimečku 1995-1997, testimony No. 053.

^[訳注 7] ヒトラーは、1940 年 7 月 28 日に、スロバキア首脳をザルツブルクに招いた (ザルツブルク会談)。ドイツ側は、前年に締結した保護条約の破棄をも辞さぬ態度で会談に臨み、スロバキア側に、(1) 独自の外交路線を歩もうとした外務大臣フェルディナンド・デュルチャンスキーの更迭、(2) テイツ、マッハなどの急進派による政権交代、(3) 内政・外交の重要分野への顧問官 (Berater) の派遣、(4) 総統制の採用を求め、そのとおりに推移した。

⁽³¹⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 048.

喪失した。ユダヤ人への迫害はますます激しさを増し、彼らを助けようとした公務員やスロバキア市民に対する処罰もいっそう激しくなった。学校にも人種差別の波が打ち寄せ、1940年政令第208号（1940年8月30日制定）に基づきユダヤ人生徒が追放された。ユダヤ人は公立学校を除くすべての学校から追放され、公立学校では別クラスで教育を受けた。V. B. (1935年生まれ)は、当初は公立学校に通学していたが、1941年9月からはユダヤ人学校へ通わなければならなかった。その証言はこうである。

当時テプリツェ [トレンチンの東約14^{キロ}] にはユダヤ人学校が1つあった。ユダヤ人の子どもが多くいたためである。私はその学校に通い始めた。その学校は、私たちのただ1人の教師（女性）が最初の移送の日に連行されるまで機能していた。ユダヤ人少女が連れ去られたとき、先生も移送され、とうとう学校がなくなってしまった。⁽³³⁾

J. V. (1932年生まれ)の証言によれば、この少年は高校を退学処分となった。次のように言われたことを覚えている。

お前は、この社会の一員ではない。⁽³⁴⁾

保護者たちも追放措置に反応した。I. M. (1894年生まれ)はホテルの主人で、それぞ

れ1926年、1928年、1934年に生まれた3人の子 [当時14歳、12歳、6歳]の父親である。1940年10月、免除を求める手紙を大統領府に書いた。その理由は次のとおりである。

[上2人が]公立学校から退学させられることになりましたが、それは子どもたちにとって大きな損失を被ることになります。また、[子どもたちに]精神的トラウマを引き起こしかねません。⁽³⁵⁾

当然ながら、学校に関してはまだ他にも証言がある。I. K. は次のように述べている。

……数日前に鞆をもらったことを覚えている。他の少年たちと同様、私も学校については様々な思いを抱いていた。私は9月1日に学校へ通い始めた。が、その日が国民学校の1年生として通学した最後の日になった。それからは、村の1年生にはよくあることだが、教室が1つだけの学校に通った。⁽³⁶⁾

一部の子どもの証言からは、マジョリティであるスロバキア人の子どもたちがユダヤ人に対して抱いた否定的な態度に関する情報も得ることができる。1940年当時わずか6歳であったユダヤ人少年 T. F. (1934年生

⁽³³⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 086.

⁽³⁴⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 044.

⁽³⁵⁾ Slovak National Archive (Slovenský národný archív), fund Office of the Prime Minister (Úrad predsedníctva vlády), box 24, number 49241.

⁽³⁶⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony I. K. / Bratislava 2025; Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 053.

まれ)は1940年のころのことを次のように証言している。

1940年、当時6歳だった私には覚えていることがある。……街に出ることができなかった。怖かった。1度だが、唾を吐かれ蹴られたことがあった。ヒトラーユーゲントやフリンカ警固隊などの青年が多かったが、年少の団員にもそうされた。そして、決まった時間には私たちは家にいなければならず、街に出ることが許されなかった。⁽³⁷⁾

しかし肯定的な証言もある。I.K.によれば、こうである。

……私には男の子と言わず女の子と言わず、友達がいて、よく一緒に遊んだ。……村の人達から敵意の目で見られたり、抑圧されたりするようなことは、まったくなかったと思う。両親もそう感じていたのではないか。⁽³⁸⁾

[1939年3月14日に]スロバキア国が建国されると、ユダヤ人の社会的身分とか専門的職業従事者としての身分が迅速かつ計画的に剥奪されるようになった。証言を見れば、これは抽象的な政治過程ではなく、具体性をもって深く心の中に染み込んでいったことが分かる。子どもたちはそのことを、学校から

の追放、友人関係の喪失、日常生活に浸透し強まってゆく敵意などを通じて体験した。この始まりは、[ユダヤ人に対する]社会的・市民的疎外であったが、これは、その次の、さらに過激な迫害段階(ユダヤ人からの経済的収奪の完全な実行)の踏切板になったのである。

6. アーリア化と「ユダヤ法」

1940年9月、ナチス・ドイツはスロバキアにおける「ユダヤ人問題の解決」の顧問官としてディーター・ヴィスリチェニー⁽³⁹⁾を派遣した。その計画は単純であって、約8万9000人のユダヤ人から財産を没収して[貧困化させ]意図的に「問題」を創出する、そして財産を失ったユダヤ人を強制的に「移住」させる、その上で、この流れが必然的であることを一般大衆に周知する——というものであった⁽⁴⁰⁾。

しかしながら、スロバキア政府には、政府としての考えがあった。1940年9月、スロバキア議会は政府に対し、「ユダヤ人問題の解決」を1年以内に完了させるための広範な権限を付与した。これを定めたのが、授権法と言われる1940年憲法^[訳注8](1940年法律第210号)である⁽⁴¹⁾。1940年9月から1941年9月にかけて政府がしたこととは言えば、

⁽³⁹⁾ Katarína Hradská. *Prípady Wisliceny. Nacistický poradcovia a židovská otázka na Slovensku.* (The Wisliceny Case. Nazi advisors and the Jewish question in Slovakia.) Bratislava 1999.

⁽⁴⁰⁾ Slovak National Archive (Bratislava), Fund of the National Court, Dr. A. Vašek, Tn ľud 17/46. Statement by D. Wisliceny.

^[訳注8] “constitutional Act”. 「憲法的法律」とも訳される。憲法そのものではないが、それと

⁽³⁷⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995–1997, testimony No. 059.

⁽³⁸⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony I. K. /Bratislava 2025/; Archive Oral history, Foundation Milan Šimečka 1995–1997, testimony No. 053.

ユダヤ人問題を「解決」するための法令の制定だけである。なにしろこの1年間に300を超える政令と布告が發布されたのである。これによって、ユダヤ人の経済的・社会的・市民的権利が体系的に剥奪された。

その後、スロバキア政府は自らの責任を放棄し、専門機関を設置してユダヤ人問題に対処させた。その機関とは、1940年政令第222号に基づく中央経済局（Ústredný hospodársky úrad：ÚHÚ）である。この中央経済局は、「あれこれの指示を出して、経済生活からユダヤ人を排除し、ユダヤ人財産をキリスト教徒の所有に移転するために必要な一切を措置した。」⁽⁴²⁾

中央経済局の主要業務は、ユダヤ系企業（工場を含む）の清算とアーリア化、ならびにそのための反ユダヤ主義的法令の立案である⁽⁴³⁾。中央経済局は首相府と二人三脚で事に対処した。中央経済局の初代局長はアウグ

スティーン・モラーヴェク⁽⁴⁴⁾である。1940年9月になると、国の肝いりで唯一のユダヤ人の公認団体である「ユダヤ人センター（Ústredňa Židov：ÚŽ）」⁽⁴⁵⁾が設置され、すべてのユダヤ人に加盟が義務付けられた。ユダヤ人センターは、国からの命令をユダヤ人コミュニティに強制することを基本任務とした。

反ユダヤ立法の頂点にあるのは、1941年9月9日に採択された1941年政令第198号（いわゆる「ユダヤ法（Židovský kódex）」^[訳注9]）である。これは、人種原理に基づく「ユダヤ人問題の解決」のための政令であり、ヨーロッパで最も残虐な反ユダヤ法の1つである。全

リア化法）によって、アーリア化（ユダヤ人の企業、商取引、工場の清算）が実行された。

⁽⁴⁴⁾ Augustín Morávek（1901年～？）。スロバキアの政治家。1940年～1942年、中央経済局長。反ユダヤ政策および反ユダヤ主義的立法に積極的に関与。中央経済局長として、アーリア化政策とユダヤ人企業の清算を管理。戦時中に、中央経済局による汚職事件の捜査が始まると、（おそらく国外へ）逃亡し戦後の裁判を免れた。See Stanislav Mičev. *Augustín Morávek od arizácie k deportáciám.* (Augustín Morávek. From Aryanisation to Deportations.) Banská Bystrica 2010.

⁽⁴⁵⁾ 設置法は1940年政令第234号。

^[訳注9] 1941年9月9日施行ユダヤ人の法的地位に関する1941年政令第198号（Nariadenie zo dňa 9. septembra 1941 o právnom postavení Židov）。英語版は以下の通り。“Degree on the Legal Status of Jews (Documents),” *Judaica Slovaca Series*, Volume 132, First Edition Bratislava 2022. Published by the SNM-Museum of Jewish Culture (SNM: Slovenské národné múzeum - Múzeum židovskej kultúry). Editor-in-chief of the series: M. A. Michal Vaněk, PhD.; Translation: Alan Dykstra, Karol Mikloš; Type setting and graphic design: Virvar s. r. o.; Printing: Virvar s. r. o.; ISBN 978-80-8060-526-1. 日本語版は以下の通り。木村和

同等の効力を持つ個別法の謂。スロバキアだけでなく、チェコスロバキア、ドイツ、オーストリア、フランスにもある法概念（“Verfassungsgesetz”, “Loi constitutionnelle”）。日本にも「憲法」と同じ効力を持つ個別法はあるが、法体系上の概念としての「憲法」はない（憲法第21条が規定する表現の自由に基づく放送法はその1例と言われる）。

⁽⁴¹⁾ 憲法（1940年法律第210号、1940年9月3日制定）：「第1条（1）政府は、次の目的のために必要なあらゆる措置を講ずる権限を有する。

(a) ユダヤ人をスロバキアの経済的・社会的な生活から排除すること

(b) ユダヤ人財産をキリスト教徒の所有物に移転すること

(2) 第1条に基づく権限は、この法律の施行の日から1年間有効とする。」（憲法/1940年法律第210号、スロバキア法典1940年版所載）

⁽⁴²⁾ Ivan Kamenec. *On the Trial of Tragedy*, pp. 123–128.

⁽⁴³⁾ 1940年政令第313号（いわゆる第二次アー

270 条に及ぶこのユダヤ法は、スロバキア共和国が存続していたときに制定された法令の中では条文が最多である。ナチスのニュルンベルク法^{〔訳注 10〕}と同様に、この政令は人種原理に基づいてユダヤ人を定義している。カトリック司教団がこれに反対し、バチカンは外交ルートを通じて抗議した⁽⁴⁶⁾。大統領ティソには、特定の個人に対して「反ユダヤ措置の適用を」免除することができる権限があった⁽⁴⁷⁾^{〔訳注 11〕}。1941 年政令第 198 号「ユダヤ法」で規定されたユダヤ人の識別標識「ダビデの黄色い星、六芒星」の強制的着用は、識

別の仕方を詳細に定めた内務省令が公布された 1941 年 9 月 18 日から実施された⁽⁴⁸⁾。

多くのユダヤ人家族は、絶望的な経済的窮境に突き落とされた。ヴィシュニー・スヴィドニク地方裁判所〔スロバキア東部、コシツェの北約 100 哩〕で首席書記官を務めていた J. A. W. (1909 年生まれ) は、数通の嘆願書を提出した。彼には 1934 年と 1939 年に生まれた 2 人の子どもがいた。当初は法務省から解雇が免除されていたが、1941 年 4 月 1 日に解雇されると、絶望的な状況に追い込まれた。そこで首相府に免除を求めて次のような請願書を提出した。

今貧困の只中にいる私は、罪のない家族とともに死にゆく身になりました。これまで収入の 1 部を蓄えることができませんでしたので、私には生きる術がありません。家族の者は、最低限生き延びられ

範訳「ユダヤ人の法的地位に関する 1941 年スロバキア共和国政令第 198 号」『経済論集』（北海学園大学）第 73 巻第 2 号，2025 年 11 月。

^{〔訳注 10〕} ユダヤ人から公民権を剥奪した法律。1935 年 9 月 15 日、ニュルンベルク・ナチス党大会に国会を招集して制定した以下の 3 つの法律からなる。「ドイツ人の血とドイツ人の名誉を保護するための法律」「公民法」「帝国国旗法」。詳しくは、『研究成果報告書 ドイツ・ナチズム期におけるユダヤ人立法の法史的・法思想的の研究』（研究代表者 佐野 誠）16530009, 平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究（c））、2006 年 5 月参照（奈良教育大学学術リポジトリ）（<https://www.bing.com/ck/a?!&&p=1a0e4d6796ff5686da5b85958eb7380c3847f086b8ad3792bc834304aae8b589JmldHM9MTc2MjIxNDQwMA&ptn=3&ver=2&hsh=4&fclid=306401ce-3cb5-6dba-2a90-141538b56b39&psq=%e3%83%a9%e3%82%a4%e3%83%92%e5%9b%bd%e6%97%97%e6%b3%95&u=a1aHR0cHM6Ly9uYXJhLWVkdS5yZXBvLm5paS5hYy5qcC9yZWVncmVMTIxNDYvZmlsZXMvMjAwOTAxMTQtMS5wZGY>, accessed on Nov. 5, 2025)。

⁽⁴⁶⁾ Ivan Kamenec - Vilém Prečan - Stanislav Škorvák (eds.), *Vatikán a Slovenská republika (1939–1945) Dokumenty*. (Vatican and Slovak Republic 1939–1945. Documents.) Bratislava: SAP, 1992. pp. 56–66.

⁽⁴⁷⁾ これは、1941 年政令第 198 号（ユダヤ法）

第 255 条および第 256 条に基づく。[参考。第 255 条 (1) 共和国大統領は、本政令の規定についてその適用除外を定めることができる。(2) 適用除外は全部又は一部であり、その条件を付すことができる。(3) 適用除外はいつでも廃止することができる。第 256 条 1939 年政令第 63 号若しくはユダヤ人の法的地位又は法的関係を規定するその他の法令に基づく免除については、これを本政令に基づく類似の規定による免除とみなす。これらの免除に対しては必要な変更を加えて第 255 条第 3 項の規定を準用する。]

^{〔訳注 11〕} ユダヤ法は、大統領に対して強制移送などを有償で免除する権限を与えた。国民法廷（戦後）におけるティソの供述によれば、免除の判定は大統領が単独で行った。これによって移送免除となったユダヤ人は 1000 人（家族を入れて 5000 人）と言われていた。

⁽⁴⁸⁾ *Official Gazette*, 9 September 1941, p. 1573.

るよう支えてくださる善意の人々の慈悲に縋すがっています。私1人だけでしたら、この運命を黙って受け入れるでしょう。しかし妻は耐えられません。私たちの結婚は皆の模範でした^{〔訳注12〕}。このことはお調べくだされば、はっきりします。今や、私たちは地獄に落とされました。理由は分かります。不足と貧困に加えて2人の幼い子どもたちを抱えているために、状況は悪化の一途を辿っています。妻は貧しく何の手立てもなく、いかんともしがたい状態にあります。妻の目の前には破滅しかなく、逃げ場がありません。……なにとぞ私を例外としてお認めくださり、真っ当に生きて家族を扶養できるようにしていただきますようお願い申し上げます。何の落ち度もない妻と子どもたちが悲惨な生活を強いられることのないようお願い申し上げます。⁽⁴⁹⁾

法令の条文や政令は、施行と同時に間髪を入れず、しかも具体的で心理的に働いて壊滅的な結果をもたらし、子どもの自己認識と社会における立場を根本的に変容させた。以下の証言にあるように、ユダヤの星の強制的着用は単なる行政措置ではなかった。それは、国が〔ユダヤ人と非ユダヤ人の〕社会的絆を瞬時に断ち切る屈辱的行為であった。A. F. (1935年生まれ)は次のように回想している。

両親と街に出かける場合、ユダヤ人は胸と背中に〔ユダヤの〕星を付けなければならなかった。両親は私には星を付けるつもりはないと言った。父は有名人で皆に顔を知られていたから、「ユダヤ人なのに星を付けていない。」と誰かが告げ口をするかもしれない。……両親と出かけるときには、あらかじめ練習しておいた。私は一緒に歩かず、10分か15分後ろを星をつけずに歩く。そうすれば、両親が捕まっても、私は逃げられる。叫んだり声を出したりせず、追いかけてもいない。2度と会えない覚悟は決めていた。⁽⁵⁰⁾

P. H. (1935年生まれ)は、この頃のことを次のように記憶している。

昔はよく路上でサッカーに興じた。私の上着に黄色の六芒星が縫い付けられるまでは⁽⁵¹⁾、私には仲良しの友人が何人もいた。ところが、ある日突然、私は以前とは違う少年になった。かつて一緒に栗を投げ合い、サッカーをし、学校へ通った同じ友達が……突然、私に石を投げつけ、路上で追いかけて始めた。何がなんだか分からないままに、自分はみんなとは違う存在かもしれないことに気づいた。ともかくも、私はみんなとは何か

〔訳注12〕理想のカップルとして称賛されていたという謂。

⁽⁴⁹⁾ Slovak National Archive (Slovenský národný archív), fund Office of Prime Minister (Úrad predsedníctva vlády), box 27, number 2869/42.

⁽⁵⁰⁾ Oral History Archive, Foudation Milan Šimečka 1995-1997, testimony No. 136.

⁽⁵¹⁾ 1941年政令第198号〔ユダヤ法〕により、6歳以上の子どもを含むすべてのユダヤ人は「ユダヤの星」を着用しなければならなくなった。

違っていることだけは分かった。しかし、どこがどう違うのかは理解できなかった。私たちの国ではユダヤ教について何か語られるようなことはまったくなかったからだ。私自身、ユダヤ教の礼拝に加わったことは一度もなく、シナゴグ [会堂] に行ったこともなかった。つまり、基本的に私たちにはユダヤ教は根付いていなかったのである。⁽⁵²⁾

中央経済局は [1940 年政令第 313 号に基づきユダヤ人財産の] アーリア化と清算政策⁽⁵³⁾ を大規模に実行し、壊滅的な結果をもたらした。ユダヤ人が経営する企業の大半は甚大な被害を受け、ユダヤ人世帯の3分の2以上が生活の術を奪われ、貧困化が社会を覆うことになった。イヴァン・カメネツ⁽⁵⁴⁾ によれば、スロバキアにはユダヤ人が経営する約 1 万 2000 の企業・商店があったが、そのうちアーリア化されたのは約 2300 に過ぎず、残りは清算された。その大半は家族経営であり、生活の手段が失われた。

1941 年の秋以降になると、貧困化したユダヤ人の存在がスロバキア共和国の重荷になり、それにつれて、ユダヤ人問題が社会問題化した。これは、スロバキア共和国による反ユダヤ主義政策の結果であるから、その政治的責任は政府、議会、大統領にある⁽⁵⁵⁾。ユダヤ人問題が社会問題化したことを裏付けるため、1942 年 4 月 1 日付の内務省による報

告書を引用する。この報告書によれば、8 万 8951 人 (約 2 万 2000 世帯) のユダヤ人のうち、3 万 2527 人 (36.6%) が有給で雇用されていた。また、4000 人のユダヤ人 (4.5%) は、就労することなく自身の財産からの収入で生活していた。企業・事業所のアーリア化と清算、就労不許可など様々な反ユダヤ的措置により、2 万 2267 人が職を失い、財産によって生計を立てていた 4000 人のうち 2500 人は生活の道を失った^[訳注 13]。この報告書によれば、収入源を失った者の約 3 分の 2 は世帯主であり、1 万 6000 世帯 (すなわち全 2 万 2000 世帯の 72%) が生計を立てる機会を失ったと結論づけている。ヴィスリツェニーの想定どおりに、「社会問題」が生じたのである。その後スロバキア政府は、自ら意図的に作り出したこの危機を、1942 年に始まった強制移送を正当化する公式の理由として利用した。そして、貧困化したユダヤ人の排除 [強制移送]こそが社会問題を解決するのに必要不可欠な対策と位置づけられることになった。

⁽⁵⁵⁾ Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, eds. *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke /1939–1945/. Dokumenty.* (Holocaust in Slovakia 2. President, government, parliament SR and State Council about Jewish question /1939–1945/ Documents.) Bratislava: NMŠ, 2005.

^[訳注 13] 収入源がない者 2 万 4767 人 [=22,267+2,500] が全ユダヤ人 8 万 8951 人に占める割合は 27.8%である。また、収入源がない者 2 万 4767 人が、かつて何らかの収入源があった者 3 万 6527 人 [=32,527+4,000] に占める割合は 67.8%である。

⁽⁵²⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995–1997, testimony No. 061.

⁽⁵³⁾ Act No. 113/1940 Coll.; Government Decree no. 313/1940 Coll.

⁽⁵⁴⁾ Ivan Kamenec. *On the Trial of Tragedy*, p. 146.

7. スロバキアからのユダヤ人の強制移送 (1942年)

ユダヤ人ゲットーと大規模労働収容所を設置する計画は、[財政上の理由から] 1941年に早々と放棄された。その代わりにスロバキア政府は貧困化したユダヤ人を「排除」しようとした。これによってユダヤ人問題の「解決」が招いた国内への影響を打ち消そうとしたのである。1941年12月にナチス・ドイツが衛星国のユダヤ人を東方に移送すると提案したとき、スロバキア政府は即座に同意した⁽⁵⁶⁾。様々な研究がなされているが、スロバキア政府が貧困化したユダヤ人をナチス・ドイツに率先して提供したのか、それともドイツ側の提案に迅速かつ積極的に応じただけなのかは、今なお判然としない⁽⁵⁷⁾。スロバキア側の文書によれば、1942年3月3日の政府会議で首相トゥカと内務大臣マツハが強制移送計画について報告している⁽⁵⁸⁾。いずれにしても、1942年の強制移送は、スロバキア共和国による反ユダヤ政策のクライマックス

である。スロバキア領内からの移送を技術で支えたのは、スロバキア共和国の当局そのものであり、強制移送の政治的責任は、政府、議会、大統領などすべての政権中枢だけでなく、政権党であるフリンカ・スロバキア国民党ならびにその準軍事組織であるフリンカ警固隊の幹部にもある。

スロバキア政府とその実行機関^[訳注14]が最初に用意したのは、強制移送列車6本と5ヶ所の収容センターである（ブラチスラバ＝パトローンカ、ノヴァークー、ポプラト、セレチ、ジリナ）。ユダヤ人は収容センターに集められ、そこから移送された。内務省は出先機関の協力を得て、移送対象となるユダヤ人の名簿を作成した。ユダヤ人を拘束したのは、憲兵隊員とフリンカ警固隊員〔フリンカ兵〕である。当時、顧問官ヴィスリツェニーがスロバキアに赴任していて、収容センターにはドイツ軍下士官が1名ずつ配置されていた。

1942年3月25日から10月20日までの半年間に、スロバキアから57本の移送列車が出発し、そのうち19本がアウシュヴィッツに、そして38本が〔旧ポーランド領〕ルブ

⁽⁵⁶⁾ YVA (Jerusalem), Fund R I (Auswärtiges Amt), Inland II g, 52/5 (Microfilm JM 2215).

⁽⁵⁷⁾ Eduard Nižňanský and Katarína Psicová. *Antisemitismus und Holocaust in der Slowakei in Dokumenten deutscher Provenienz von 1938 bis 1945*. Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2021, p. 294. (ニジニャンスキー＝プシツォヴァ「スロバキアにおける反ユダヤ政策とホロコースト (1938年～1945年)」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第71巻第4号, 2024年3月。)

⁽⁵⁸⁾ Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, eds. *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke /1939–1945/*. *Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 2. President, government, parliament SR and State Council about Jewish question /1939–1945/ Documents.) Bratislava: NMS, 2005, p. 142.

^[訳注14] この実行機関は内務省第14局である（局長はアントン・ヴァシェック）。Cf. Vanda Rajcan. “Anton Vašek, Head of the Interior Ministry’s 14th Department, His Responsibility, and Information about the Deportees.” In Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015), pp. 124–139. (ヴァンダ・ラジカン「スロバキア内務省第14局長アントン・ヴァシェックと強制移送にたいするその責任」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第71巻第1号, 2023年6月。)

リン県に向かった。スロバキア運輸公共事業省報告書（1943年1月14日付）によれば、全部でユダヤ人5万7752人が移送された（ルブリン県3万9006人、アウシュヴィッツ1万8746人）⁽⁵⁹⁾。なお、内務省と外務省の文書によれば、移送者は5万7628人である⁽⁶⁰⁾。移送列車の最初の8本に乗せられたのは、男女のユダヤ人青年である（最年少は、労働義務最低年齢の16歳）。その後、家族ぐるみの移送があった。最初の家族用移送列車は、1942年4月11日にトルナヴァ [ブラチスラバの北東約50^哩] を出発した⁽⁶¹⁾。入手可能なデータを使用すれば、それぞれの列車で移送された成人と児童の数の概数を算出することができる。例えば、1942年5月24日にポプラト [タトラ山脈北斜面のスロバキア北部、プレシヨフの西約80^哩] からルブリンへ向けた家族移送第4号列車では、成人777人、4歳～10歳142人、4歳未満83人が移送され、1942年5月31日にポプラトを出発してナウエンツォフ^[訳注15] に向かった家族移送第6号列車（ポプラト発ナウエンツォフ行）には、成人772人、4歳～

10歳113人、4歳未満51名が乗っていた⁽⁶²⁾。

最後の移送列車がスロバキアを出発する2ヶ月前の1942年8月に、[穏健派とされる] 大統領ティソはホリーチェ [ブラチスラバの北約90^哩] で開催された収穫祭の祝賀会で次のように宣言した。

もう1つ問題を提起したい。キリスト教徒が行っていることは、果たして人の道に^{かな}適っているのであろうか。強奪ではないのか。しかし、次のように聞きたい。スロバキア民族が永遠の敵であるユダヤ人を排除することは、キリスト教徒のやることなのではないか。それは、キリスト教の教義に適っているのではないか。自己愛は神からの命令であり、その自己愛のゆえに、私に害をなし、私の生命を脅かすものは何であろうとも排除せざるを得ないのである。ユダヤ分子がスロバキア人の生命を脅かしていることは、あえて言うまでもない。……スロバキアの人々よ、奴らを叩き出そう。悪しき子どもを追放しようではないか⁽⁶³⁾。

⁽⁵⁹⁾ Eduard Nižňanský (ed.). *Holokaust na Slovensku 4, Dokumenty nemeckej proveniencie. 1939–1945* (Holocaust in Slovakia 4. The documents of German origins. (1939–1945).) Bratislava: NMŠ, 2003. pp. 487–488, 532–533.

⁽⁶⁰⁾ Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, eds. *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke /1939–1945/. Dokumenty.* (Holocaust in Slovakia 2. President, government, parliament SR and State Council about Jewish question /1939–1945/ Documents.) pp. 234–235.

⁽⁶¹⁾ Eduard Nižňanský. *Holokaust na Slovensku 6. Deportácie v roku 1942.* (The Holocaust in Slovakia 6. Deportations in 1942.) Documents. Bratislava. NMŠ, 2005, pp. 239–241, 243.

^[訳注15] Nałęczów. ドイツ占領下のポーランド東部に位置するこの地は、バウゼッツ収容所（南西に約150^哩）とソビボル収容所（東に約120^哩）への鉄道の分岐点であった。この2つの収容所は、トレブリンカ収容所とともに、コード名をラインハルト作戦とするユダヤ人絶滅作戦（1942年3月中旬～1943年11月初旬）のための3大収容所と言われる。

⁽⁶²⁾ ブラチスラバ・ユダヤ教コミュニティ中央連合会（Ústredný zväz židovských náboženských obcí）保管の「移送者名簿」参照。

⁽⁶³⁾ *Slovák*, 18 August 1942, p. 4.

このようにして、フリンカ・スロバキア国民党の「急進派」と「穏健派」の立場は、驚くほど接近した。強制移送を組織した政治的責任は、スロバキア政府中枢にいた者たちに帰属する。ユダヤ系市民の殺害に同意しなかったとしても、少なくとも不確かな運命に追いやることには戦時中に同意していたからである。移送先では我が身だけでなく家族の人たちが非人間的な危害を被るかもしれず、スロバキア国内に留まっているときよりもはるかに劣悪な状況に置かれると考えられた。そうであるにもかかわらず、スロバキア共和国は、移送されたユダヤ人1人につき500ライヒスマルクをナチス・ドイツに支払ったのである⁽⁶⁴⁾。^[訳注16] ドイツ公使ハンス・ルディン (Hanns Ludin) は、1942年4月にベルリ

ンに次のように報告している。

ドイツ側は何の圧力もかけなかったのに、スロバキア政府は、スロバキア国内のユダヤ人を全員移送することに合意した。スロバキア司教団の介入にもかかわらず、大統領はみずから移送に同意した。⁽⁶⁵⁾

国家元首は、全国に向けて強制移送を正当化する演説をした。その一方で、この移送政策は、家族が暴力的に引き裂かれるという残酷な事態をもたらした。V. B. による以下の証言は、1942年3月のある夜、ある家族にとって [ホリーチェでの] ティソの三百代言が実際に何を意味するかを予示している。

1942年3月になった。あの日の夕方のことは今でも鮮明に覚えている。そのときはもう私たちは2階に住んでいた。

「恩人」のコストリックさんに追い出されたからである。テプリツェから来たと言う男がドアをノックして、父を呼び出した。父に伝えたいことがあるとのことだ。父は外へ出て5分か10分で戻ってきた。顔は真っ青だった。「固ゆでした卵を20個、ベーコンも用意してくれ。明日の朝、第1陣の移送グループと一緒に出発する。」と母に言った。行き先も言われなければ、いつ帰還できるかも告げられなかった。分かったことは、ユダ

⁽⁶⁴⁾ Eduard Nižňanský, Payment for the deportations of Jews from Slovakia in 1942. In *Discourses - diskurse*. Prague, 2008, pp. 317-331. (ニジニャンスキー「1942年におけるユダヤ人強制移送にかんするドイツに外交交渉—スロバキア、ルーマニア、ハンガリーを例にして—」(木村和範訳)『学園論集』(北海学園大学)第189・190号, 2023年3月。)

^[訳注16] この1人あたり500ライヒスマルクは、ユダヤ人の財産に対する請求権をドイツ側が放棄する見返りとして、スロバキア側が支払うことが両国の口上書(1942年)で確認された。Vgl. Eduard Nižňanský und Katarína Psicová, Die Politik des Antisemitismus und der Holocaust in der Slowakei (1938-1945). In *ditto*, *Antisemitismus a holokaust na Slovensku v dokumentoch nemeckej proveniencie 1938-1945/ Antisemitismus und Holocaust in der Slowakei in Dokumenten deutscher Provenienz von 1938 bis 1945*, Banská Bystrica: Múzeum Slovenského národného povstania], 2021, SS. 27-58. (ニジニャンスキー=プシツォヴァ「スロバキアにおける反ユダヤ政策とホロコースト(1938年~1945年)」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第4号, 2024年3月, 85頁。)

⁽⁶⁵⁾ Eduard Nižňanský (ed.), *Holokaust na Slovensku 4, Dokumenty nemeckej proveniencie. 1939-1945 (Holocaust in Slovakia 4. The documents of German origins. (1939-1945))*. pp. 127-128.

ヤ系のスロバキア人少女たちが移送されること、父はその移送グループの付き添い医師として同行することだけである。その後……祖母が私を一晩預かり、弟は両親、つまり父と母のもとに残った。翌日、祖母と私が戻ってくると、父の姿はもうなかった。母から聞いたのだが、父は当時3歳だった弟を胸に一晩中抱き続け、あれこれと世話を焼いていたそう。その後、父は2度再びと弟の姿を見ることはなかった。…………… [別の日、母が] 強制移送される前、地元の医師たちは母を助けようとした。母に熱が出る注射を打ってくれたが、当時の主任外科医は仮病だと言って、移送列車に乗車できると診断した。

V. B. の証言はさらに続く。

皮肉なことに、最初の移送の日に⁽⁶⁶⁾父が連れ去られ、最後の移送があった1942年10月に⁽⁶⁷⁾母が連れ去られた。母の誕生日に間に合うように、ジリナの強制収容所で移送を待っていた母に手紙を送ることができた。

かわいいヴェルーシュカちゃんへ、7歳の誕生日を心よりお祝いします。神様が、すぐにでも元気なあなたに会えるようにして下さいますように。そうなれば、誕生日をいっしょに喜び祝うことができますね。お利口にして、言うことを聞いて

ね。ピーターとお母さんは、心からあなたを抱きしめています。

これが母からの最後のメッセージである。⁽⁶⁸⁾

祖母と叔母、そして幼い弟と一緒に暮らしていたこのユダヤ人の少女は、どんな思いに、もがき苦しんだことであろうか。V. B. は2度と再び両親に会うことはなかった。このきょうだい はごくふつうの家庭の日常を失ってしまった。それは、どれほど大きかったことか。

家族の強制移送に関しては、何年経っても、簡単な証言しか見られない。以下は、1931年生まれのH. T. の証言である⁽⁶⁹⁾。

4月に、兄が移送された。夏に、たぶん7月に……祖母のエディタおばあちゃんが [移送された]。9月には私の番が来た。

憲兵とフリンカ兵が両親を逮捕しに来たとき、母はなんとか隠れることができた。そこで兵士は、幼い娘H. T. が通う学校へ向かうことにした。学校で娘を捕まえば、両親は出頭するにちがいないと考えたのである。以下はH. T. の証言である。

私は、黒板の前で答えたばかりだった。ルジヨムペロク [中部の中核都市、ジリナの南東約60^{キロ}] としては特別に暖か

⁽⁶⁶⁾ 1942年3月25日。

⁽⁶⁷⁾ 1942年10月20日。

⁽⁶⁸⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 086.

⁽⁶⁹⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony H. T. /Bratislava 2010/.

い9月だった。黒板に近い窓が1ヶ所、大きく開いていた。このとき2つの出来事が同時に起きた。憲兵（数人）とフリンカ兵が同時に教室のドアをノックしたのだ。誰が来たのかを見ようとして先生が教室から出る、と同時にマルタは窓からすぐに飛び降りてと叫んだ。私はすぐに人の言うとおりにする素直な子どもだったから、兵隊が教室に入る前にマルタと一緒に翌年まで逃げおおせることができた。

家族は身を隠した。逃亡者として逮捕され、セレチ強制収容所に収監されたが、そのときはもう最後の移送列車が出発した後だった。家族は命拾いをした。

子どものころに、K. N. S は、リプトフスキー・ミクラージュ [ルジヨムベロクの西約30^{キロ}] で家族と一緒に1942年の強制移送の一番列車を目撃したことを覚えている。

移送列車がスロバキア東部のポプラトからジリナへ、その先はポーランドだと聞いた。家族と一緒に列車の方へと歩いていった。列車がしばしば停車して、機関車に水を補給していたからだ。柵の向こうに立つ哀れな人々が見えた。「水をくれ！ 食べるものがない！」と叫んでいた。初めて移送列車を見たときは、とても恐ろしかった。⁽⁷⁰⁾

このユダヤ人少年の証言は、後の家族の記

⁽⁷⁰⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony K. N. S. /Jerusalem 2004/.

憶に影響されているように思われる。証言が明確すぎて、事柄をあまりにも正確に伝え、あまりにも恐ろしすぎる。このように9歳だった少年が当時を表現できると考えるのは、不自然ではないか。

I. K. の証言は興味深い。1942年の強制移送前にハンガリーへ逃れた叔母といとこたちについての証言である。叔母たちは一時的にI. K. の家に^{かくま}匿われていた。I. K. はみんなとは会わせてもらえなかった。両親は感染させないため、「病気だから会わせられない。」と言った。しかし、I. K. には理解できなかった。4歳の子はみんなのことがとても好きだった。本当のところは、両親は自分の子どもがスロバキアからの逃亡を密告しないように、あえて叔母たちの話をしないようにしていたのである⁽⁷¹⁾。

N. G. という少女（1930年生まれ）も、ハンガリーへの脱出の失敗譚（1942年）を証言している。N. G. の両親は国境を越えたが、その後ハンガリーで約3週間も投獄された。スロバキアへ送還するとき、ハンガリーの憲兵は親子を引き離そうとした。

そのとき私は大泣きしたので、憲兵は私たちと一緒に帰らせた。憲兵はブラチスラバの方向を指差した。あのとき家族を救ったのは、私だ。⁽⁷²⁾

⁽⁷¹⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony I. K. /Bratislava 2025/; Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 053.

⁽⁷²⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 085.

その後、ノヴァーキー^{〔訳注17〕}のユダヤ人収容所に送られた一家は、労働部門に配属されて強制移送を免れた。証言によれば、これは、母親の功績によるところが大きい。この母親は裁縫の達人であり、縫製工房に配属されたからである。

文献を見れば、誰が〔1942年の〕強制移送を止めたかについて憶測や議論^{かまびす}が喧しい^{〔訳注18〕}。ユダヤ人コミュニティによる社会分析によれば、例外措置を受けて移送を免れた者の大半は、専門職として不可欠な存在（医師、獣医師、技術者など）か、あるいは「経済的に有用なユダヤ人」としてアーリア化された企業に雇用された人たちであった。新たな所有者には、会社を経営する意思も能力もなかったためである。一部のユダヤ人はユダヤ人労働収容所（ノヴァーキー、セレチ、ヴィーネ）に収容され、国家のために働かされた⁽⁷³⁾。

〔訳注17〕 プラチスラバの北東約145^{km}。収容所はこのほかにもセレチとヴィーネに置かれた。ノヴァーキー収容所については、以下を参照。“Novaky,” Website of the Shoah Resource Center by Yad Vashem, https://www.yadvashem.org/odot_pdf/Microsoft%20Word%20-%205969.pdf, accessed on Oct. 30, 2025.

〔訳注18〕 移送中止の理由としては、「社会不安」の元凶としてのユダヤ人をすべて移送したので、それ以上の移送は必要がなかったこと、バチカンなどによる国際的な介入があったこと、国内のユダヤ人グループ（ユダヤ人センター内の非合法組織「作業部会」）によるドイツ側への働きかけがあったことなどが挙げられる。様々な要因が組み合わされて、移送が中止されたと考えられる。

(73) See Igor Baka, *Židovský tábor v Novákoch 1941–1944*. (The Jewish Camp in Nováky 1941–1944.) Bratislava 2001; Ján Hlavinka and Eduard Nižňanský, *The Labour and Concentration Camp in Sereď 1941–1945*. Bratislava 2009;

8. ユダヤ人労働収容所と子どもたち

1941年～1944年にはスロバキアに、3ヶ所（ノヴァーキー⁽⁷⁴⁾、セレチ⁽⁷⁵⁾、ヴィーネ⁽⁷⁶⁾）のユダヤ人労働収容所と7ヶ所の労働センターがあった⁽⁷⁷⁾。1943年には全労働収容所に3768人のユダヤ人が収容されていて、そこにはユダヤ人の児童（6歳以下）のための学校と孤児院が置かれた。ノヴァーキー収容所には184人の児童がいた（小学校に通っていたのは128人、6歳以下の子どもを収容した孤児院には54人）。セレチ収容所には115人の児童（小学生は86人、孤児院に29人）、そしてヴィーネ収容所には、児童が42人いた（小学生は27人、孤児院に15人）⁽⁷⁸⁾。14歳以上の児童には、勤労の義務が課せられた。

ユダヤ人の子どもたちは、教師と父母に助けられて、ノヴァーキー収容所では『こだま (Ozvena)』という雑誌、セレチでは『私たちの声 (Náš hlas)』という雑誌を謄写版で

Eduard Nižňanský, *Die Aktion Nisko, das Lager Sosnowiec (Oberschlesien) und die Anfänge des „Judenlagers“ in Vyhne (Slowakei)*. In *Jahrbuch für Antisemitismusforschung 11*. Berlin 2002, pp. 325–335.

(74) Igor Baka. *Židovský tábor v Novákoch 1941–1944* (The Jewish Camp in Nováky 1941–1944). Bratislava 2001.

(75) Ján Hlavinka and Eduard Nižňanský. *The Labour and Concentration Camp in Sereď 1941–1945*. Bratislava 2009.

(76) Marián Pavúk. *The Fate of the Jews in Vyhne*. Banská Bystrica 2012.

(77) Eduard Nižňanský et al. *The Holocaust in Slovakia 5. Jewish labour camps and centres in Slovakia 1938–1944. Documents*. Bratislava 2004.

(78) Archive Museum of the Slovak National Uprising, Banská Bystrica, fund IX, S 152/81.

刷って発刊した⁽⁷⁹⁾。そのうちの数冊が残っている⁽⁸⁰⁾。一部を引用する。

心を飛ばたかせよう。この身の運命が酷烈で幸福だと思えずに、手を差し伸べて物乞いをする人のように世界に苦境を嘆こうとも、絶望してはならない。⁽⁸¹⁾

当時 11 歳だった少女 H. T. は、次のように証言している。

そこで起きたことはほとんど覚えていない。おとなでも子どもでも誰のことであろうと、思い出せない。覚えているのは、巨大な部屋の 2 段ベッドで寝ただけ。小さなことだが、藁ふとんとか毛布とかがあったかどうか。本当に分からない。別の部屋で、何日かの間はたくさん子どもたちや先生と一緒にいた。これを書いていると、ひどい苛立ちのような感覚が蘇ってくる。それは、きっと当時も感じていたのかもしれない。考えてみると、ほとんどの子どもたちもそう感

じていたのだろうと思う。先生は何かを教えてくれた。それは何かをさせて子どもたちを忙しくさせるためだ。そうすれば、周囲で起きていることやおとなの話に気を取られる暇がなくなるからである。とにかくそこに留まっていた期間は短い。おそらく 4 週間ちょっとだったのではないか⁽⁸²⁾。

この証言者の記憶からは、「誰」が「何」をしたか〔主語と目的語〕が薄れている。表出しているのは、核心的な感情（「ある種の我慢ならない不快感」）という素朴な感覚である。トラウマが物語としてのまとまりを失わせてしまい、物語の形式では表現できない強烈な感情だけが残滓^{ざんし}として心の深層に沈殿している。

ノヴァーキー収容所については、P. H. (1935 年生まれ、83 歳) からの別の証言がある。P. H. は 1943 年に母親と一緒に収容所に到着した。

当時 8 歳の少年だった私にとって、ノヴァーキー収容所はどこでもドキドキわくわくの場所であった。遠足用の靴を履いて歩き回れたし、セーターやウインドブレーカーを着ることができたからだ。家では着ることを許されなかったのに。家にいたころは、山へ出かけるときしか着たことがない。……そこには同じ年頃の冒険好きの少年がたくさんいて、一緒に過ごした。黒い制服を着て磨き上げ

⁽⁷⁹⁾ 同校の校長であったアレクサンデル・バフナル (Alexander Bachnár) は、2 号が発行されたと述べている。この新聞は、音楽の才能あるユダヤ人の少年、トマス・ディビアン (Tomas Dibian) が編集した。バフナルは回顧録の中で、ユダヤ人のクラスで生き残ったのは少女が 1 人だけで、他の生徒は強制収容所で殺害されるか、 Banska・ピストリツア近郊のクレムニツカにある集団墓地で銃殺されたと記している。Alexander Bachnár. *Sto mojich rokov.* (My hundreds-years.) Banská Bystrica 2019, pp. 88-89.

⁽⁸⁰⁾ Yad Vashem Archive, Jerusalem, fund M-5/87.

⁽⁸¹⁾ *Ozvena*, (Echo,) 8 March 1944, No. 1, Yad Vashem Archive, Jerusalem, fund M-5/87.

⁽⁸²⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony H. T. /Bratislava 2010/.

られたブーツを履いたおとなの人たち⁽⁸³⁾が、僕たちの仲間を蹴ったり平手打ちにしたりするのを目撃したことが何度かある。⁽⁸⁴⁾

1944年8月[29日]にスロバキア国民蜂起が勃発すると、3ヶ所の収容所はすべて解体された。スロバキア中部の反乱地域では、ユダヤ人たちはつかの間ではあったが、また自由に息ができるようになった。子どもたちから「先生」に宛てた日付不明の手紙が投函されたのは、1944年秋である。収容所で2年以上を過ごしていたこの子どもたちは、普通の生活を送ることができなかった。奇妙だとも思うが、その気持ちは分かる。子どもたちは次のように書いて送った。

先生、ここ（バンスカ・ビストリツァ——引用者）は本当に面白みのない町です。ここの人たちにはまったく馴染めません。⁽⁸⁵⁾

9. 「平穏な年」 — 1943年～1944年—

1942年の強制移送の後にスロバキアに残ったユダヤ人は、約2万人である。そのうち約4500人はユダヤ人労働収容所（ノヴァーキー、セレチ、ヴィーネ）と数ヶ所のユダヤ人労働センターに収容された。1943年まで、数百人の若いユダヤ人男性が第6労働大隊で

強制労働を強いられた。この他に国内に残されたユダヤ人の中には、「経済的に有用なユダヤ人」と言われた例外がいた。これらのユダヤ人は、アーリア化された企業で働いていた。なぜなら、[企業の所有権を取得した]アーリア化の担い手（Aryaniser）は、ほとんど経営能力もなければ意欲もなく、金もうけだけを考えていたからである。様々な職業への就労が例外的に認められたユダヤ人もいた（例えば医師、獣医師）。代わる人材がいなかったのである。大統領ヨゼフ・ティソが例外として認めたユダヤ人は約1000人である[家族を入れると5000人]。主として、「昔からの改宗者（old convert）」（スロバキアが独立する以前にキリスト教に改宗した者）であった。

「アーリア人証明書」を持ってスロバキアに残留したユダヤ人も、一部にはいる。家族や知人を通じて、キリスト教徒（カトリックとかルーテル派など）であることを証明する偽造書類を手に入れた不法滞在者である。免除資格を喪失したり偽造書類が発覚したりすると、即座にユダヤ人労働収容所に強制移送された。

1943年2月、内務大臣兼フリンカ警固隊総司令官のアレクサンデル・マッハは、ルジヨムベロク [バンスカ・ビストリツァの北約53^{km}] で開催されたフリンカ警固隊の会議で演説し、次のように宣言した。

とは言え、3月が過ぎ4月になれば、強制移送列車が出発することになるだろう。⁽⁸⁶⁾

⁽⁸³⁾ フリンカ警固隊員（フリンカ兵）の謂。

⁽⁸⁴⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 061.

⁽⁸⁵⁾ Igor Baka. *Židovský tábor v Novákoch 1941-1944.* (The Jewish Camp in Nováky 1941-1944.) Bratislava 2001, p. 98.

⁽⁸⁶⁾ *Gardista*, 9 February 1943, p. 2.

1943年には、スロバキア・ユダヤ人の強制移送が再開されようとしたが、実行には至らなかった。[1943年2月2日に]ドイツ国防軍がスターリングラードで敗北を喫し、さらに[1943年5月13日には]ナチス・ドイツとファシスト・イタリアがアフリカで敗北したからである。徐々に戦況は反ヒトラー連合(アメリカ、イギリス、ソ連)に有利なほうへと傾き始めていった。

10. スロバキア国民蜂起とユダヤ人

1944年8月29日にスロバキア国民蜂起が勃発した⁽⁸⁷⁾。武装親衛隊と国防軍に加えて、親衛隊大将ゴットローブ・ベルガー⁽⁸⁸⁾麾下の特別分遣隊第H部隊が投入された^[訳注19]。

⁽⁸⁷⁾ [スロバキア中部の都市バンスカ・ピストリツァで勃発した]スロバキア国民蜂起は、反ファシストによる政治的・軍事的蜂起である(1944年8月29日~10月26日)。ヨゼフ・ティソ政権に反対するスロバキアの有力者(共産主義者と民主主義者)が蜂起を準備し、反ヒトラー連合への参加を宣言した。軍事行動はスロバキア国軍とパルチザンの共同による。主としてスロバキア中部で起こった蜂起は、ナチス・ドイツ軍によって鎮圧され、約1万1500人のユダヤ人がアウシュヴィッツ、ラーフェンスブリュック、マウトハウゼン、ベルゲン・ベルゼンへ強制移送された。パルチザン、兵士、ユダヤ人、ロマの人々、民間人など約5300人がスロバキアの集団墓地で虐殺された。[10月26日以降も戦争終結まで抵抗は続いた。]

⁽⁸⁸⁾ Gottlob Christian Berger (1896年~1975年)は、ドイツのナチス高官で親衛隊大将。第二次世界大戦中、親衛隊長官を務め、隊員募集を担当した。

^[訳注19] Cf. Ján Stanislav, Stanislav Mičev, *The Anti-Jewish Reprisals in the Slovakia from September 1944 to April 1945*. In Dezider Tóth (ed.), *The Tragedy of Slovak Jews*, Museum of the Slovak

ベルガーをはじめ、ドイツ公使ハンス・ルディン⁽⁸⁹⁾などのドイツ高官による1944年9月1日の会議で、「ユダヤ人問題」を抜本的に解決することが決定された。特別分遣隊第H部隊(司令官ヨゼフ・ヴィティスカ)⁽⁹⁰⁾は、フリンカ兵に警備させてユダヤ人を収容所に収監した。

^{アインザッツグルッペ}特別分遣隊第H部隊の作戦行動に関する1944年12月9日付のヴィティスカの報告書は、[掃討作戦の成果を]余すところなく伝えている。曰く、逮捕者総数は1万8937人、そのうちユダヤ人9653人、パルチザン3409人、その他脱走兵等、と。強制収容所に移送されたユダヤ人約8975人、「その他(sonstige)」530人。逮捕者のうち殺害された者2257人(この殺害のことをドイツ軍は“Sonderbehandlung”(特別措置)と言った)。(集団墓地からは、ユダヤ人、スロバキア人、ロマの人々、兵士、パルチザン、「反乱者」、民間人などが混在して発見されている。歴史学者スタニスラフ・ミチェフ(Stanislav Mičev)によれば、スロバキア国内には211ヶ所の集団墓地があり、5306人の犠牲者が埋葬されている。)

National Uprising (Banská Bystrica, Slovakia), 1992, Chap. 11. (ヤーン・スタニスラフ、スタニスラフ・ミチェフ「スロバキアにおける反ユダヤ主義者の報復(1944年9月~1945年4月)」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第73巻第3号。)

⁽⁸⁹⁾ Hanns Elard Ludin (1905年~1947年)は、1941年~1945年、プラチスラバ駐在ドイツ公使。第二次世界大戦後、国民法廷で有罪判決を受け、処刑。

⁽⁹⁰⁾ Josef Witiska (1894年~1945年)は親衛隊中佐。1944年9月、スロバキア駐在第H部隊の司令官で、ナチス・ドイツの治安虐殺部隊を指揮した。

1944年9月末頃、アドルフ・アイヒマン^[訳注20]の側近の1人、親衛隊中尉アロイス・ブルンナー⁽⁹¹⁾がスロバキア・セレチ収容所長に着任し、ユダヤ人の新たな強制移送を組織した。最新の研究では、1万1719人のユダヤ人が11本の移送列車でセレチから移送された（行先は、アウシュヴィッツ、ベルゲン・ベルゼン、オラニエンブルク、ラーフェンスブリュック、マウトハウゼン、テレジエンシュタット）⁽⁹²⁾。

ドイツ占領軍は、次第にスロバキアに浸透してきた。以下に引用するH. T.の証言によれば、1944年秋ごろには一家は、スロベンスカ・ルプツァ（Slovenská Ľupča）〔蜂起が勃発したバンスカ・ビストリツァの東約11^哩〕に移転させられ、そこから〔さらに約11^哩、山間の道を南に下った〕ポヴラツニーク村（Povrazník）に送られた。

^[訳注20] Adolf Eichmann（1906年～1962年）。ヨーロップ・ユダヤ人の絶滅方針を定めたヴァンゼー会議（1942年1月、ラインハルト・ハイドリヒ主宰）の議事録担当。ユダヤ人の大量移送計画を具体化。1960年、潜伏中のアルゼンチンでイスラエルの諜報機関（モサド）によって身柄を拘束され、1961年、イスラエルの法廷で「人道に対する罪」などにより死刑判決、翌年執行。

⁽⁹¹⁾ Alois Brunner（1912年～？）は、1939年にウィーン・ユダヤ人移住中央事務所（所長アドルフ・アイヒマン）に所属し、ウィーン、ベルリン、サロニキ〔テッサロニキとも〕、スロバキアからの強制移送を組織化した。〔西ドイツに潜伏した後、シリアの政治顧問に招聘された。同地で2010年までには死亡したとされるが、詳細は不明である。〕

⁽⁹²⁾ Ján Hlavinka and Eduard Nižňanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Seredi 1941-1945*. (The Labor and Concentration Camp in Sered' 1941-1945). Bratislava: DSH 2009.

〔それから〕3日目か4日目のこと。窓の下のベンチに座っていると、見慣れない制服を着た兵士が見えた。あつという間に、武装兵が何人も家の中に押し入ってきた。男性全員を連行していった。後で知ったが、兵隊は〔連行先の〕村の奥でユダヤ人全員に列から出ると命令した。父は列から出た。それ以来、父の姿は2度と見ることはない。何年もの間、昼と言わず夜と言わず父のことを思って泣いた。母と私があの日のことを口にするとはなかった。父のことも話題にはできなかった。どうして偽造書類を使わなかったのか。私には分からなかった。父は3代前からのアーリア人の血統であることを示す証明書を持っていたのに。……（H. T.の父親は、近くのポニキ山地でドイツ軍の手によってポヴラツニーク、シャビ（Šajby）〔ポヴラツニークの西約85^哩〕、ポニキ（Poniky）〔ポヴラツニークの西約9^哩〕とその周辺地域で捕縛された大集団のユダヤ人男性と一緒に射殺された。―引用者）ある村から……戻ったばかりの村人から話を聞いた。おそらくポニキからまっすぐに戻ってきたのだろう。この村人は、私たちの家族のことを話しているとは知る由もなかった。話を聞いた私たちはどうやって平静を保ったのか。自分でも分からない。そのときは、恐怖で完全に凍りつき、声も出せず、何も聞こえなかった。あの村人が最初のひと言を発したとき、何も耳に入らなかったのだ。あの瞬間は、それが父のことだと認めたくなかったからだと思う。数週間後、家の裏

壁に積んだ薪を取りに行った。丸太の陰から何枚かの紙を見つけた。今でも、あのときの思い出がパニックとなって蘇る。^{よみがえ}それが何かはすぐに分かったが、このときも声が出なかった。黙って母に渡した。私たちは2人きりになった。母が私の目の前で泣いたのは、そのときが最初で最後だった。それは父の「血統を示す」書類だった。私たちがそのことを話題にすることは、ついぞなかった。私はそれを意識の13番目の部屋、つまり無意識の奥に深くしまい込んだからである。……父は、身体検査でユダヤ人であることが発覚してしまえば、持っていた書類「血統証明省」が無効になってしまうことを恐れていたのだと思う。その後も、私たち母子は、あのことがあった同じ村に、同じ書類を持って住んでいた。そのとおり。父は私たちを守るために、心に決めて進んでみずからを犠牲にしたのだ。私は、20年もの間戦争のころの夢に苦しみ続けた。⁽⁹³⁾

11. 山岳地帯への逃避

少年 I. K. が最初に潜伏したころのことで記憶しているのは、防水シートを屋根にしたテントである。そのころ、息子が学校に通えない以上は、独学しかないと考えた母親は計算と読み書きを教えた。その後、父親が戻り壕の建設が始まった。小屋のような壕である。

⁽⁹³⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony H. T. / Bratislava 2010/.

11月になれば、どこかへ引っ越すと言われた。私にとっては、それはある意味で冒険であった。……行ってみると、気に入った。藁が敷き詰められていて、防水シートを^{かぶ}被せ、マットレスを敷いた。父を見て笑ったのを覚えている。父は背が高くなかった。私も背が低かったが、父があゝの壕に入ると、頭がつかえた。私はこう言った。弟を肩車しても、僕は歩けるよ、と。……もちろん、あそこで生活するには、誰かが食料や時々ニュースを持ってきてくれなければ無理だった。……あの人たちが2日おきに勇気を持って訪れてくれたことは、今でもすごいと思う。温かいスープやら何やらを持ってきてくれた。……牛乳、パンなど、最低限の食べ物を運んでくれた。だから、あの人たちのことをますます尊敬している。そうすると言われても尊敬する。あの人たちへの感謝の気持ちも決して忘れない。私たちを売るようなことはしなかったからだ。……しかも、1人だけではなかった。私の記憶では、4家族か5家族がそうしてくれたと思う。⁽⁹⁴⁾

村の他の者たちも彼らのことを知っていたが、誰も密告しなかった。こうして家族は解放されるまでを生き延びた。

⁽⁹⁴⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony I. K. / Bratislava 2025/; Oral History Archive, Foundation Milana Šimečku 1995–1997, testimony No. 053.

12. 街なかに隠れて—1944年～1945年—

T. F. (1934年生まれ) は、ブラチスラバの修道院に身を潜めた。

そのとき、みんなは、フルボカ・チェスタ (Hlboká cesta) [ブラチスラバ北部の郊外] の修道院へ向かった。そこにはウルスラ会女子修道院があり、私たちはそこに匿^{かくま}われた。……その修道院について言っておきたいことがある。1944年の強制移送の前に、修道院に匿^{かくま}ってもらえる保証はなかった。父と母には、ウルスラ会女子修道院に頼りになる人がいた。そこにいたマザー・ベルナーダが私たちを助けてくれた。そしてマザー・ベルナーダも修道院長のマザー・グレゴリアも、そしてもちろん修道院の誰もが、私たちのことをユダヤ人の子どもだと知っていた。私の異母兄弟のベニ・クラインもそこにいたし、他にも数人のユダヤ人の子どもが匿^{かくま}われていた。私たちは勉強し、教会にも通った。祈り方も全部知っていた。ただ1つ、懺悔^{ざんげ}だけはしたことがない。どうしてだろうか。⁽⁹⁵⁾

T. F. は修道院を離れなければならなかったが、その理由は説明されていない。それでも、母親が何とか別の隠所^{かくれが}を手配して、解放されるまでそこで暮らした。

⁽⁹⁵⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation, testimony No. 059.

13. 1944年から1945年にかけての冬季における強制移送と迫害

スロバキア・ホロコーストの最終段階は、国民蜂起の鎮圧後の1944年から1945年の冬の時期に当たる。迫害は重大な転換点を迎へ、国の主導からドイツの主導による強制移送と絶滅へと向かっていった。残されたユダヤ人の子どもたちにとって、この時期は単に苦難が続いた時期ではなく、ナチス収容所システムのコア部分へと投入された時期であった。したがって、この時期の証言は、それまでの社会的・経済的排除に関する物語の域を超え、テレジーン [テレジエンシュタット]、ベルゲン・ベルゼン、ラーフェンスブリュックなどの強制収容所での生活と生存に関する生々しい記録になっている。これらの物語は、それまでに規範を拠り所^{きりどころ}にしていた現実 (normative reality) が完全に崩壊し、そのときに表出する鈍麻^{どんま}した感情 (emotional numbness) から非日常的日常 (the perversion of daily routine) に至るまでを言葉で表現し、至る所で死と非人間化が常態化^{じょうたいか}する中で必死に生き延びようとした子どもたちの心の働きを浮き彫りにしている。

少年 F. F. (1932年生まれ) は、両親と一緒にテレジーン収容所^[訳注 21]へ送られた。収

[訳注 21] ボヘミア・モラヴィア保護領プラハの北約60^哩。本来は18世紀に造営された要塞都市。ヨーゼフ2世がその母マリア・テレジアの名にちなんでその名を付けた。ドイツ語の地名はテレジエンシュタット (Theresienstadt)。ドイツは、1941年11月24日から1945年5月9日まで、大要塞にはユダヤ人ゲットー、強制収容所、経過収容所 (一時的な収容施設) をおき、小要塞にはゲシュタポ刑務所があった。ユダヤ人を人道的に

容所の状況について次のように述べている。

ドイツ人は、世界に向けて誇らしげにテレジーンのことを「模範収容所」と言ったが、他の収容所と変わるところがまったくない収容所であった。……同じように人間が死んでいった。セレチのときと同じように一日一日が過ぎ、働くことも勉強することもない日々が続いた。あるのは畑仕事とか庭仕事だけで、10歳から13歳の男の子ができる仕事といえば、草刈りていどだった。[作業には]年配のおとなが付いてきた。⁽⁹⁶⁾

P. K. (1938年生まれ) は、6歳でベルゲ

ン・ベルゼン強制収容所に移送された。P. K. は、あの手この手で自分たち子どもを楽しませようとしてくれた様子を回想している。その記憶には、子どもの視点とおとなの視点の両方からのコメントが入り混ざっている。

どこで、どのベッドで誰が死んだかを数えた。それが毎日の日課だ。ほかの子の母親とか私の母が面会に来るたびに、死んだ子の名前を教えた。それが日常だった。死者が出るのは、ごく普通のことで日常の一部と言ってもいい。感覚が麻痺していて、そこで起きている死の意味や死亡という現象がどういう意味を持っているかが分かっていなかったのかもしれない。⁽⁹⁷⁾

E. S. (1940年生まれ) は、両親がトボルチャニー [ブラチスラバの北東約105^{キロ}] のアパートからセレチ収容所に連行されたときに残酷な扱いを受けた。それが4歳の子にどのように影響したかを表現する言葉を記憶の中に探した。E. S. には双子の兄弟がいた。

これが起きたのは、1944年9月9日。私たち一家の悲劇が始まった。兄弟のロベルトと私はまだ幼く、小さい子にすぎなかった。とは言え、小さすぎるということもなかった。それほどの「ねんね」ではなかったということだ。あの瞬間に、何か恐ろしいことが起きていた。そ

処遇している場に見せかけて、ドイツはプロバガンダに利用した。1944年6月23日、国際赤十字委員会はモーリス・ロッセル (Maurice Rossel) を団長とする代表団を派遣した。後に、ロッセル報告はテレジン・ゲッターを美化していると批判された。Cf. Website of the Terezin Memorial, <https://www.pamatnik-terezin.cz/>, accessed on Nov. 4, 2025; “Theresienstadt,” Website of the National Holocaust Museum, <https://www.holocaust.org.uk/theresienstadt>, accessed on Nov. 4, 2025; Livia Rothkirchen, *The Jews of Bohemia and Moravia: Facing the Holocaust*, Lincoln: University of Nebraska Press, 2006; 以下のサイトに表示される2次元バーコードにより、テレジン収容所の仮想ツアーが体験できる。 https://www.smart-guide.org/branch-landing-page/?_branch_match_id=1514009834192525907&utm_source=Website&utm_campaign=Terezin%20website%20-%20marketing&utm_medium=website&_branch_referrer=H4sIAAAAAA8soKSkottLXT08t0SvOTSwq0U0vzUxJ1csvStcPdywOCHBPCwwPt68rSk1LLSrKzEuPTyrKLy9OLbJ1TUIPBQADvOmrPgAAAA%D%3D, accessed on Nov. 4, 2025.

⁽⁹⁶⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony, No. 048.

⁽⁹⁷⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation, 1995-1997, testimony No. 039.

んなことに気づかず、理解できなかったわけではない。つまり、僕たちは、まだそんなに おとな ではなかった、しかし何かが起こっていることには気づいた。理不尽な何かが。…… 子どもにしてみれば、両親が得体のしれない悪の力によって、羊のように、牛のように、豚のように、家畜のように取り扱われるのを見るほど、屈辱的で、人間としての尊厳が傷つけられるものはない。あの瞬間に、両親に抱いていた尊敬の気持ちが、どういうわけか、子どもの私たちからは消えてしまった。⁽⁹⁸⁾

その後、E. S. は両親と弟と一緒にテレジーンに移送された。自宅から連行された日の出来事は、我が人生で経験したことの中で最も強烈なトラウマとなっている、と E. S. は語っている。

ブラチスラバ出身の F. W. の話⁽⁹⁹⁾ は、興味深い。母親が例外的な処遇を受けていて、1944 年までの迫害を感ずることがなかったからである。当時、F. W. は片親で、祖母が 1 人いたが、他の家族は死亡していた。

あんたとは赤の他人だからね。混血婚の子だと言うんだよ。ユダヤ人ではない父親が、今に迎えに来ると言わなければならぬよ。

「こう言って母は私の命を救ってくれた。」

⁽⁹⁸⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995-1997, testimony No. 102.

⁽⁹⁹⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony F. W. / 2004, Jerusalem/.

と F. W. は説明してくれた。F. W. が母親の姿を最後に見たのは、移送列車に乗るときだった（母親はアウシュヴィッツ強制収容所に移送され、そこで殺害された）。14 歳の少年は 1 人収容所に残され、父親の到着を待ち、移送されたアウシュヴィッツを生きた。1944 年 12 月、オラニエンブルクに移送され、そこから「春ごろに」マウトハウゼン強制収容所に移送された。F. W. は収容所からの「死の行進 (death march)」^[訳注 22] を生き抜いたが、そのことで記憶していることは何もない。当時の自分について知っていることは何もないと言い、次のように証言している。

目が覚めたら、アメリカ軍の病院にいた。

F. W. には、1945 年 5 月 5 日にアメリカ軍によって収容所が解放されたときの記憶がまったくない。その後、チェコスロバキアの収容者（複数）と一緒にブラチスラバへ送り返された。戻った F. W. は、短い期間ではあったが祖母が亡くなる直前に再会を遂げた。それからは正真正銘の孤児^{みなしこ}になってしまった。母親が強制収容所から戻ることはなかった。F. W. はスロバキアで電気技師の見習いになった。ユダヤ人学校の同級生数人と

^[訳注 22] Todesmärsche (ドイツ語)。軍事的敗北が濃厚となった 1945 年 1 月、ドイツ親衛隊は強制収容所の収容者が連合軍の手に落ちるのを防ぐべく、ほとんどもを徒歩で移動させた。Cf. “Death marches,” Website of the *United States Holocaust Memorial Museum* (USHMM), <https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/death-marches>, accessed on Nov. 2, 2025.

再会したので、孤独ではなかったと言う。

その後、F. W. はパレスチナへの移民を支援する団体（「子どもアリヤー（children's Aliyah）」^(執筆者補注3)）で訓練を受け、キブツにたどり着いた。そこで将来の妻となる女性に出会った。この女性もまたスロバキア出身だった。F. W. の物語は、ランガーのいわゆる「苦悩の記憶」「分裂した自我」の形成に関する深い事例研究の対象になる。母親の犠牲——自らの命を代償として死地に赴く覚悟の母親が我が子に見せた行為——は究極の「死滅した出来事」を象徴する。F. W. の全世界が家族もろともに完全に崩壊した瞬間である。その後、孤児として生き延びた F. W.

^(執筆者補注3) F. W. からの聞き取りでは「子どもアリヤー」となっているが、歴史上正確な組織名は「青少年アリヤー（Youth Aliyah）」である。

「アリヤー」はヘブライ語で「上昇（ascension）」の謂。パレスチナ（後のイスラエル）への移民を意味し、宗教的・歴史的には「イスラエルへの帰還」を意味する言葉として使用される。1933年にナチス・ドイツで始まった「青少年アリヤー」運動は、ナチスの迫害から逃れようとした、主として12歳から17歳のユダヤ人青少年の移住を支援する人道的取組である。これは、ユダヤ人青少年をイギリスの委任統治領であったパレスチナに再定住させ、住居と学校の機能を併せ持つキブツや青少年村に配置して、教育と職業訓練を施した。

この取組は戦後も様々な国で継続された。我々が実施した聞き取り調査で当時の運命を語ったスロバキアの子どもたちの中には、後に家族と再開を遂げた子どももいたが、しばしば孤児となって、身一つでパレスチナに到着した者もいる。このような子どもたちはキブツに預けられるのが一般的であり、そこで教育を受け、労働に従事した。多くの子どもにとって、「移住」は家族との離別をいつまでも長引かせることを意味した。

は、この内面に沈殿した「死滅した出来事」とともに生きることになった。その記憶は単なる生存の記録ではない。癒されない喪失と不離の関係にある生存体験、それが、戦後に形成された F. W. のアイデンティティの核になっている。

少年 P. H.（1935 年生まれ）は 1944 年の秋、母親と一緒にラーフェンスブリュック収容所に移送された。そこでは、助けてくれる人々に出会ったが、その一方ではひとかけのパンすら奪おうとする泥棒にも遭遇した。親衛隊員による体罰も受けた。ジャガイモを盗もうとした罪で、25 回の棒打^{ぼううち}の刑を宣告された。その痛さは強烈で、3 回で気を失った。ほぼ毎日、死と向き合っていた P. H. は、終戦を迎えたときは、まだ 10 歳の少年だったが、その日々を感じた、全身が麻痺したような感覚を今でも覚えている。

死体を踏み越えなければならなかった。

そのようなことは何回もあった。3 日前には 3 つ離れた寝棚で眠っていた人^{また}を跨がなければならなかった。⁽¹⁰⁰⁾

P. H. のこの記憶も、序論で述べたランガーの理論的枠組についての例示にふさわしい。ジャガイモを盗もうとしたことで残酷に殴打されたことは、「屈辱の記憶」となって表出する。痛みと罰を受ける肉体へと還元されるアイデンティティ。同時に、飢えのゆえに窃盗しようとする自己、そしてその P. H. から盗みを働く他者の存在。これらの出来事 of the

⁽¹⁰⁰⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation 1995–1997, testimony No. 061.

体が「汚れた記憶」[「恥ずべき記憶」]という痛ましい領域に巣くっている。それは伝統的な道徳が崩壊した世界の投影であり、そこには生きようとするだけのために道徳的にはどうかと思われる選択を強いられた被害者がいる。

14. 生 還

解放された子どもたちの記憶は、強烈である。母親と一緒にベルゲン・ベルゼン強制収容所に収容されていたケジュマロク [スロバキア中部の都市、プレシヨフの東約 80^{km}] 出身の A. W.⁽¹⁰¹⁾ は、イギリス軍が収容所を解放した 1945 年 4 月 15 日のこと⁽¹⁰²⁾ を記憶している。しかし、この女性にとって解放は、トラウマの^{ひとこま}一齣にすぎない。戦争が終わり解放されてから、多くの収容者と同様に母親もチフスに罹患し、それが元で死亡したからである。A. W. は、その後のことを次のように証言している。

死んでもなお母は、病院の清潔なベッドに寝かせてもらえた。解放後に母のためにイギリス軍が用意してくれたのだ。

戦後の A. W. について、次のように証言している。

私はもう人間ではなくなってしまった。

何も感ずることができなくなった。母が死んでからというもの、私は泣くことがなかった。

確かに、A. W. はこうなった自分を、少女時代に強制収容所で経験した状況と結びつけていた。その A. W. は、自分が再び人間になった瞬間もしっかりと覚えている。解放後、A. W. は、ベルゲン・ベルゼン収容所に 1 人残された（父と兄弟（1 人）は別の収容所に収容されていた）。同胞の帰国を支援するために、チェコスロバキアからの調査団がベルゲン・ベルゼンを訪れた。当時 10 歳の少女 A. W. は、痩せ細り衰弱していた。心身の回復のために、ひとまずスウェーデンに送られた。1945 年 6 月のある日のことを、A. W. は次のように述べている。

私が再び人間になったのは、そのときだ。初めて泣いた。家に帰してほしいと頼んだ。

プラハを經由してケジュマロクまでは、約 2 週間かかった。長距離を歩けない A. W. が背負われて移動しなければならなかっただけではない。鉄道網が破壊されていたからでもある。

A. W. は、戦後の状況に対する子どもたちの様々な反応について語っている。A. W. は学校に通い始めたが、兄は登校を拒否した。かつて自分を殴り、悪口を言い、石まで投げたスロバキア人の同級生と同じクラスには行きたくなかったからである。その後のこととして A. W. が語ったのは、チェコスロバキアからの「子どもアリヤー」（執筆者補注 2 参

⁽¹⁰¹⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony A. W. /Jerusalem 2004/

⁽¹⁰²⁾ Susanne Bardgett and David Cesarani. *Belsen 1945. New Historical Perspectives*. Middlesex: Vallentine Mitchell, 2006.

照)に参加する準備をしたということだけである。言葉と宗教の面での準備を受けたという意味である。ベルギーの「どこか」で開かれた準備キャンプにいたことも、A.W.は記憶していた。戦後のユダヤ人の子どもたちの会話についてのA.W.の語りは興味深い。次のように述べている。

誰が死んだかはみんなが知っていた。誰が誰を失ったかもみんな知っていた。しかし、そのことを口にした人は誰もいない。

その後、A.W.は、「子どもアリヤー」に加わってパレスチナへ渡った。そこのキブツで、同じくチェコスロバキアから同じ移民団で来た将来の夫と出会った。

少年K.N.S.は、ベルゲン・ベルゼン収容所に収監され、その後救出された。そして、K.N.S.と母親は軍の病院に移送され、医療を受けて回復を果たした。その後、赤十字委員会は療養のためスウェーデンへ送ろうとしたが、2人は故郷のチェコスロバキアに帰還することを望んだ。そこで赤十字委員会のバスでプラハを経由してブラチスラバへ戻ったが、まもなく家族は誰も残っていないことが分かった。しばらくの間、ヴェントゥルスカ通り [ブラチスラバの中心街] に住むいとこの家に寄寓した。やがて、スロバキア国民蜂起軍に参加した叔父のペーラが迎えに来て、リプトフスキー・ミクラージュ [バンスカ・ビストリツアの北東約80^{キロ}] へ連れて行ってくれた。祖母は身を潜めて強制移送を免れ、K.N.S.と母親を待っていたのである。家族はなんとかしてアーリア化された店

を取り戻し、生活の基盤を固めた。少年は8年制のグラマー・スクールで学業を再開し、午後には定期的にスポーツを始めた。こうして元気を取り戻すことができた。K.N.S.はこの時期の興味深い出来事も回想している。ベルゲン・ベルゼン収容所で収容者として毎日死と向き合い、人間性を失っていたが、それを取り戻した瞬間だ。それはオートバイ事故で運転していた人が死亡するのを目撃したときである。K.N.S.はこう述べている。

そのとき急に気分が悪くなった。ベルゲン・ベルゼンでは何の感情もなく死体を無造作に取り扱っていたときに失った人間性が、あれを見たときに戻ってきた。自分がどうすれば生まれ変われるかを考え始めたのは、そのときからである。

少女H.T.も解放のことを思い出している。

ある日、日が暮れたころ、ポヴラズニク村 [スロバキア中部の山村、ジリナの南東約110^{キロ}] の山のほうから誰かが叫んだ。ドイツ軍が来るぞ、皆すぐに隠れろと。しかし、家にいるだけで十分だった。兵隊は足早に撤退していて、留まって乱暴を働くには時間がなかったのである。最終的な敗北の秋が近づいていた。……外に出た母と私は窓のそばで一晩中、ひと言も発することなく、ほとんど無表情で、途切れることのないドイツ軍の隊列を見つめていた。最後の1人が視界から消えたとき、母は私を抱きしめた。悲しい冬の初めての出来事だ。母

は、「何も見えない、中に入ろう。」そう言ったように思う。……父はいつか必ず帰ってくる、ポニキ [10.] で殺されたのは他の人だと確信していた。⁽¹⁰³⁾

H. T. には、何の感情もなく、何の喜びもない。簡単には取り戻すことができないごく普通の生活をただひたすら声を潜めて待つだけであった。

少年 F. F.⁽¹⁰⁴⁾ はテレジーン収容所から解放されたときのことを記憶している。

みんなは喜びでいっぱいだった。でも僕は、どうということもなかった。打ちのめされた人生には、訪れるものは何もないと思っていた。ましてや良いことなど来ようとは思いつまなかった。……だからあの瞬間はよく覚えていない。僕たちがあの人たちを歓迎したかどうか、分からない。思い出せない。……ただ、あの人たちが、その後で僕たちを集合させたことだけは知っている。プラハ帰還委員会の人たちだった。

ブラチスラバに戻ってみると、そこには大いなる失望が待っていた。

僕たちは自分の住むアパートさえ見つけられなかった。アパートは、一切切切を奪った連中が占領していた。自分たちのアパートだ、返せと訴え出る場所すらな

かった。父の商売は跡形もなくなっていた。倒産したのだ。私たちは表通りの不動産屋を探し当てた。店主は「どうしようもできなかった。」と言ったが、真っ赤な嘘だ。不動産屋がすべてを売り払ってしまっていた。こうして私が生まれたこの街で、小さなスーツケース1つだけが残された。私も両親もただ途方に暮れるばかりだった。

1950年代、P. K. [13.] はある組織の行事に参加してベルゲン・ベルゼンを訪れた。P. K. は、母親と一緒にその収容所に収容されていた。戦後に母親は病死した。収容所を再訪したときの心境について P. K. は、最初はどうも調子を合わせる事ができたが、次第に押しつぶされてしまったと語っている。

そして最後の行事になった。涙がこぼれそうになった。まったく参った。その場にいることが耐えられない。母がそばにいてくれたら、もっとうまくできたかもしれない。しかし、母はもういない。母が私と一緒に経験したすべてが、そして私が今ここにいるために自分を犠牲にしてくれたあの記憶が蘇ったのだ。

記憶の中では子どもの視点とおとなの視点が絡み合う。その知的な絡み合いの中から、道徳、責任、苦痛や罪悪感などへの内省がさらに深まってゆく。例えばベルゲン・ベルゼン収容所における P. K. の記憶では、ドイツ兵の立場についても考察している。

ドイツ人の中にも、政権に協力せず、い

⁽¹⁰³⁾ Archive Eduard Nižňanský, testimony H. T. /Bratislava 2010/.

⁽¹⁰⁴⁾ Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation, testimony No. 048.

やいやそこにいた者たちがいた。おそらく、あの人たちも苦しんだのだろう。強制収容所で起きていることすべてを目撃しなければならなかったのだから。兵士がそこに行くのを拒否できたとは、考えにくい。当然のことだ。そう自分に言い聞かせている。

15. 結 論

本稿の目的は、スロバキア・ホロコースト史を読者に簡潔に示すとともに、公式文書や統計では捉えにくいホロコーストの人間的な側面を浮き彫りにすることである。このために子ども時代について口述した生存者の歴史的証言を分析することにフォーカスした。本稿で取上げた証言は補足的な説明資料ではない。極限体験、トラウマ、記憶の本質に関する第一義的知識源である。証言の中では、事件を経験した子どもの視点と、それを記憶し物語として理解しようとするおとなの視点という二重の視点が絶えず絡み合い、しばしば対立しあいながら表出する。このことを認識することが重要である。

子どもの視点については、記憶が不十分とか「信頼できない」とかが問題になるのではない。それが、子どもの記憶というもののもっとも本質的な特性なのであろう。証言から明らかになる子どもの視点の特徴は、即時的感觉、断片性、状況についての不完全な理解である。子どもたちは、匂いや寒さ、空腹感、制服への恐怖、突然友人と距離ができて疎遠になったことによる混乱、親の不安、家族との別れを記憶している。これらの断片は、ローレンス・ランガーのいわゆる「深層

の記憶」(未処理のままに身体に記憶された痛みや屈辱)である。

その一方で、おとなの視点は「共通の記憶」を表出させる。これは、記憶の断片を論理的枠組と時間軸の中に整理し、おとなになってから獲得した知識の助けを借り、アーリア化とか強制移送を歴史的背景に置いて、記憶を生み出した原因とその結果を説明する。

こうして証言は、おとなの語り手が過去に子どもだった時代の原体験を不断に翻訳し解釈する動的な働きを通じて表出することになる。経験されたことと理解されたことの間で途切れることなく行われる対話、そしてまた感情と事実との間で途切れることなく行われる対話が、個人的経験としてのホロコーストの現実を一番よく表現する。

子どもの視点から見たホロコーストは、[切り離して取り出された]破滅をもたらすただ1つの行為(a single cataclysmic act)ではない。自分が知っている世界が少しずつ壊されてゆく過程である。この崩壊過程は、例えば両親の店頭で反ユダヤの落書きが書かれたというような、家が汚され安寧の象徴が破壊されることから始まった。それに続いて、学校では除け者にされ、楽しい幼少期とも友人関係とも切り離され、ついには我が家を失い、強制移送されるに及んで、崩壊過程は頂点に達した。おとなの目から見れば、このような措置は、政治的隔離の手段であったが、子どもたちは、これを[世間からの]理解不能な裏切りとして受け止める。その瞬間に、自分たちは、周囲の人々にとっての「よそ者」になってしまうからである。

それとともに、強制移送そのものは、強烈

な感覚を伴う特異なイメージとなって子どもの記憶に刻まれることが少なくない。例えば、移送前夜に父親が弟を抱きしめた記憶、収容所からの走り書きに記された母親の最後の言葉、捕まった場合に備えて、走るようにとか口をつぐむようにとかを教え込まれたことなどが、そうである。おとなの語り手は、スロバキア国による組織的計画的な絶滅措置の一環であったという知識の枠の中に、それらの事柄を収めようとする。しかし、子どもの記憶には、[かけがえのないものを] 失った喪失感と [社会から] 見捨てられたという本質だけが純粋な形で残る。

収容所での生活の記憶にも、同じような二面性が表出する。おとなたちはノヴァーキーヤやセレチの収容所のことを迫害装置の一部と捉えている。それに対して、子どもたちはそこで過ごした生活の特定の一部（学校、劇場、仲間との遊び）を冒険心や、奇妙ではあるが、ある種の新しい日常感覚と結びつけることができた。子どもたちのこの視点は、日常性が幻想と化し、その幻想までもが完全に消え去ったナチス絶滅収容所についての記憶とはまったく対照的である。ここで子どもの視点には、明日をも知れぬ死に対する恐るべき適応を見て取ることができる。ベルゲン・ベルゼン収容所で夜間に亡くなった子どもたちの数を数えることを「日常業務」の一部と

していた P. K. [13.] の証言は、生き抜くために必要とされる感覚が完全に麻痺し鈍麻したことを示す、身も凍るような実例である。

突き詰めて言えば、解放は万能薬ではなかったことが証言から分かる。苦悩を変容させただけである。多くの生存者が、「もう一度人間として生きる」ということは、強い心を必要とし (conscious)、しばしば苦痛を伴うと言っている。日常生活への復帰が独りでに (automatic) 達成されるということはないのである。A. W. [14.] は、スウェーデンへの強制出国に抵抗し帰国を要求したときに、初めて涙を流す能力を取り戻したと気づいたことを述べ、K. N. S. [14.] は、戦後オートバイによる事故死を目撃したときに初めて人間性が戻ったと述べている。これらは、重要な瞬間であった。この2人は、生き延びるには一時的に共感や感情を麻痺させる必要があったことを吐露している。普通の世界への復帰には、感じかたの再学習が必要であった。そうするには、一再ならず、自分が失ったすべてと向き合わなければならなかった。おとなになった語り手は、このように「分裂した自己」を自覚しながら、それとともに生きている。現在の自己は、いつも過去と向き合わされ、愛する者たちの「死についての内的経験」と向き合わされ、そして破壊された自己の世界とも向き合わされるのである。

文献等

文書館・定期刊行物等

- Archive Eduard Nižňanský.
Archive Museum of the Slovak National Uprising, Banská Bystrica, fund IX, S 152/81.
Gardista (daily), 1943.
Národné noviny (daily), 1938.
Oral History Archive, Milan Šimečka Foundation, 1995–1997.
Slovak (daily), 1938.
Slovak Law Code, 1939, 1940
Slovak National Archive (Slovenský národný archív), fund Office of the Prime Minister (Úrad predsedníctva vlády).
Slovak National Archive (Bratislava), Fund of the National Court, Dr. A. Vašek, Tn ľud 17/46.
Yad Vashem Archive, Jerusalem, fund M-5.

主要参考文献

- Bachnár, Alexander. *Sto mojich rokov*. (My hundreds-years.) Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2019.
Kamenec, Ivan, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek (eds.), *Vatikán a Slovenská republika (1939–1945) Dokumenty*. (Vatican and Slovak Republic 1939–1945. Documents.) Bratislava: SAP, 1992.
Nižňanský, Eduard and Katarína Psicová. *Antisemitismus und Holocaust in der Slowakei in Dokumenten deutscher Provenienz von 1938 bis 1945*. Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2021.
Rothkirchen, Livia. The Situation of the Jews in Slovakia between 1939 and 1945. In: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 7, 1998.
Nižňanský, Eduard and Ivan Kamenec (eds.). *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke /1939–1945/. Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 2. President, government, parliament SR and State Council about Jewish question /1939–1945/. Documents.) Bratislava: NMŠ, 2005.
Nižňanský, Eduard (ed.). *Holokaust na Slovensku 4, Dokumenty nemeckej proveniencie. 1939–1945*. (Holocaust in Slovakia 4. The documents of German origins. (1939–1945).) Bratislava: NMŠ, 2003.
Nižňanský, Eduard et al. *Holokaust na Slovensku 5. Židovské pracovné tábory a centrá na Slovensku v rokoch 1938–1944. Dokumenty*. (The Holocaust in Slovakia 5. Jewish labour camps and centres in Slovakia 1938–1944. Documents.) Bratislava. NMŠ, 2004.
Nižňanský, Eduard. *Holokaust na Slovensku 6. Deportácie*. (The Holocaust in Slovakia 6. Deportations in 1942.) Documents. Bratislava. NMŠ, 2005.
Nižňanský, Eduard et al. (eds.), *Slowakisch-deutsche Beziehungen 1938–1941 in Dokumenten I. Von München bis zum Krieg gegen die UdSSR*. Prešov: Universum, 2009.

引用文献・関連文献

- Baka, Igor. *Židovský tábor v Novákoch 1941–1944*. (The Jewish Camp in Nováky 1941–1944.) Bratislava: Zing Print, 2001.
Dreyfus, Jean-Marc - Eduard Nižňanský. Jews and No-Jews in the Aryanization process: Comparison of France and the Slovak State. 1939–45. In: *Facing the Catastrophe. Jews and Non-Jews in Europe during World War II*. Edited by Beate Kosmala et al. Oxford: Berg 2011, pp. 13–40.
Hallon, Ludovít. Arizácia na Slovensku 1939–1945. (Aryanization in Slovakia 1939–1945) In: *Acta Oeconomica Pragensia* 7, Nr. 7, pp. 145–160.

- Hallon, Ludovít - Ján Hlavinka - Eduard Nižňanský. Pozícia Ústredného hospodárskeho úradu v politickom, hospodárskom a spoločenskom živote Slovenska v rokoch 1940–1942. (The position of the Central Economic Office in the political, economic, and social life of Slovakia in the years 1940–1942.) In: *Arizácie*. (Aryanization.) Edited by Eduard Nižňanský - Ján Hlavinka. Bratislava 2010, pp. 11–65.
- Hlavinka, Ján. Arizačný proces ako súčasť “riešenia židovskej otázky” na Slovensku. (The aryanization process as part of the “solution to the Jewish question” in Slovakia.) In: *Acta Judaica Slovaca*, 2008, pp. 21–38.
- ditto*. “I never negotiated with the Jew.” On the Aryanizations of Slovak writer Ludovít Mistrík-Ondrejov. *Historický časopis*, (Historical Journal,) 68, 6, 2020. (フラヴィンカ 『『どのユダヤ人とも交渉したことはない。』—作家ミストリーク＝オンドレヨフによるアーリア化—』(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学) 第73巻第2号, 2025年11月。)
- Hlavinka, Ján - Martina Fiamová. Arizácia židovského majetku. (Aryanization of Jewish property.) In: Martina Fiamová *et al.* *Slovenský štát 1939–1945. Predstavy a realita*. (The Slovak State 1939–1945. Ideas and reality.) Bratislava: Historický ústav SAV, 2014, pp. 255–272.
- Hlavinka, Ján - Eduard Nižňanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Sereďi 1941–1945*. (The Labor and Concentration camp in Sereď 1941–1945.) Bratislava: DSH, 2009.
- Hlavinka, Ján, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.). *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015)*, Žilina, 2015. (集録された全8篇の論文の翻訳(木村和範訳)は、『経済論集』(北海学園大学) 第70巻第2号(2022年9月), 同第4号(2023年3月), 第71巻第1号(2023年6月)に掲載されている。)
- Hradská, Katarína. Vorgeschichte der slowakischen Transporte nach Theresienstadt. In: *Theresienstädter Studien und Dokumente*. 1996. (フラツカ「テレジエンシュタットへのスロバキアからの強制移送—前史—」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学) 第71巻第1号, 2023年6月。)
- ditto*. Die Lage der Juden in der Slowakei. In: *Judenamanzipation - Antisemitismus - Verfolgung in Deutschland, Österreich-Ungarn, den Böhmisches Ländern und in der Slowakei*. Edited by J. Hoensch *et al.* Essen: Klartext, 1999.
- ditto*. *Pripad Wisliceny. Nacistický poradcovia a židovská otázka na Slovensku*. (The Wisliceny Case. Nazi advisors and the Jewish question in Slovakia.) Bratislava: Academic Electronic Press, 1999.
- ditto*. Der deutsche Berater und die „Lösung der Judenfrage“ in der Slowakei. In: *Theresienstädter Studien und Dokumente*, 2002. (フラツカ「ドイツ顧問官とスロバキアにおける『ユダヤ人問題の解決』」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学) 第71巻第1号, 2023年6月。)
- ditto*. The Influence of Germany on the ‘Solution of the Jewish Question’ in Slovakia. In: Waclaw Dlugoborski, Dizider Tóth, Teresa Świebocka, and Jarek Mensfelt (ed.), *The Tragedy of the Jews of Slovakia 1938–1945: Slovakia and the “Final Solution of Jewish Question”*, Auschwitz-Birkenau State Museum and Museum of the Slovak National Uprising: Oświęcim/Poland and Banská Bystrica/Slovakia, 2002. (フラツカ「スロバキアにおける『ユダヤ人問題の解決』に対するドイツの影響」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学) 第73巻第3号, 2026年3月。)
- Hradská, Katarína - Ivan Kamenec *et al.* *Slovenská republika 1939–1945*. (Slovak Republic 1939–1945.) Bratislava: Veda, 2015.
- Hruboň, Anton. *Alexander Mach. Radikál z povolania*. (Alexander Mach. The Radical by Profession.) Bratislava: Premedia, 2018.
- Kamenec, Ivan. *Jozef Tiso. Tragédia politika, kňaza a človeka*. (Jozef Tiso. The Tragedy of a Politician, Priest and Man.) Bratislava: Premedia, 2013.

- ditto*. *On the Trial of Tragedy. The Holocaust in Slovakia*. Bratislava: H&H 2007.
- ditto*. Phenomenon of the Holocaust in Historiography, Art and the Conclusion of Slovak Society. In: *Holocaust as a Historical and Moral Problem of the Past and the Present*. Edited by Monika Vrzgulová *et al.* Bratislava: DSH, 2008, pp. 311–339.
- ditto*. *Slovenský štát*. (Slovak State.) Praha: Anomal, 1992.
- Kershaw, Ian. *Der NS-Staat*. Hamburg: Rohwolt Verlag, 1989.
- Kühnl, Reinhard. *Faschismustheorien. Ein Leitfadens*. Rohwolt: Heilbron, 2014.
- Mason, Timothy. Intention and Explanation: A current Controversy about the Interpretation of National Socialism. In: *Der "Führerstaat". Mythos und Realität. Studien zur Struktur und Politik, Des Dritten Reiches*. Edited by Gerhard Hirschfeld *et al.* Stuttgart: Klett-Cotta, 1991, pp. 22–41.
- Mičev, Stanislav. *Augustín Morávek od arizácie k deportáciám*. (Augustín Morávek. From Aryanisation to Deportations.) Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2010.
- Nižňanský, Eduard. Anti-Semitic Policies of Jozef Tisos during the War and before the National Court. In: *Policy of Anti-Semitism and Holocaust in Post- War Retribution Trials in European States*, edited by Mičev, Stanislav *et al.*, 113–148. Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2019.
- ditto*. Die „Arisierung“ jüdischen Vermögen in der Slowakischen Republik. In: *Eigentumsregime und Eigentumskonflikte im 20. Jahrhundert: Deutschland und die Tschechoslowakei im internationalen Kontext*, edited by Dieter Grosewinkel *et al.* Essen: Klartext 2018, pp. 373–412
- ditto*. Die Deportationen der Juden in der Zeit der autonomen Slowakei im November 1938. In: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 7, 1998, 20–45.
- ditto*. Der Holocaust in der Slowakischen Historiographie der neunziger Jahren. In: *Bohemia*, Band 44, Heft 2, 2003, pp. 370–388.
- ditto*. Die Machtübernahme von Hlinkas Slowakischer Volkspartei in der Slowakei im Jahre 1938/39 mit einem Vergleich zur nationalsozialistischen Machtergreifung 1933/34 in Deutschland. In: *Geteilt, besetzt, beherrscht*, Edited by Monika Glettler *et al.*, 249–287. Essen: Klartext Verl. 2004.
- ditto*. Die Vorstellungen Jozef Tisos über Religion, Volk und Staat und ihre Folgen für seine Politik während des Zweiten Weltkrieges. In: *Religion und Nation: Tschechen, Deutsche und Slowaken im 20. Jahrhundert*, edited by Kristina Kaiserová *et al.*, 39–83. Essen: Klartext, 2015.
- ditto*. Expropriation and Deportation of Jews in Slovakia. In: *Facing the Nazi genocide: non-Jews and Jews in Europe*, 205–230. Berlin: Metropol, 2004.
- ditto*. *Interpretácie fašizmu historiografiou SRN /1945–1990/*. (Interpretations of fascism by German historiography /1945–1990/.) Nitra: Vysoká škola pedagogická v Nitre, 1995, pp. 119–137.
- ditto*. *Obráz nepriateľa v propagande počas II. svetovej vojny na Slovensku*. (Image of the enemy in propaganda during World War II in Slovakia.) Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2016.
- ditto*. Payment for the deportations of Jews from Slovakia in 1942. In: *Discourses - diskurse*. Praha, 2008, pp. 317–331.
- ditto*. The discussions of Nazi Germany on the deportation of Jews in 1942 - the examples of Slovakia, Rumania and Hungary. In: *Historický časopis*, no. 59 (2011), 111–136. (ニジニャンスキー 「1942年におけるユダヤ人強制移送にかんするドイツに外交交渉—スロバキア, ルーマニア, ハンガリーを例にして—」 (木村和範訳) 『学園論集』 (北海学園大学) 第189・190号 (合併号), 2023年3月。)
- ditto*. The Holocaust in Slovakia (1938–1945), 2022, unpublished in Slovakia. (ニジニャンスキー 「スロバキアのホロコースト (1939年～1945年)」 (木村和範訳) 『学園論集』 (北海学園大学) 第189・190号 (合併号), 2023年3月。)

- ditto*. The “Aryanisation” of Jewish Property in the Slovak Republic. In: *Property Regimes and Property Conflicts in the 20th Century: Germany and Czechoslovakia in an International Context*. Edited by Dieter Grosewinkel *et al.* Essen: Klartext 2018, pp. 373–412;
- ditto*. Expropriation and Deportation of Jews in Slovakia. In: *Facing the Nazi genocide: non-Jews and Jews in Europe*, 205–230. Berlin: Metropol, 2004.
- Eduard Nižňanský - Katarína Bohová. Perception of the Holocaust in Slovak Historiography and Among the General Politic after the Establishment of the Slovak Republic in 1993. In: *United in Diversity. Contemporary European Jewry in an interdisciplinary Perspective*. Edited by Marcela M. Zoufalá *et al.* Oldenbourg: De Gruyter 2023, pp. 7–50. (ニジニャンスキー＝ボホヴァ 「1993年スロバキア共和国樹立後における歴史学と一般市民によるホロコーストの認識について」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第2号, 2023年9月。)
- Nižňanský, Eduard - Ludovít Hallon - Ján Hlavinka. *Ústredný hospodársky úrad /Holokaust na Slovensku/*. (Central Economic Office /The Holocaust in Slovakia/) Bratislava: Historický ústav SAV, 2010 (CD-Rom).
- Nižňanský, Eduard - Ján Hlavinka. *Arizácie*. (Aryanization.) Bratislava: Stimul, 2010.
- Nižňanský, Eduard - Ján Hlavinka. *Arizácie v regiónoch Slovenska*. (Aryanization in Slovakia’s regions.) Bratislava: Filozofická fakulta Univerzity Komenského v Bratislave, Dokumentačné stredisko holokaustu pri Historickom ústave SAV, (Faculty of Philosophy, Comenius University in Bratislava, Holocaust Documentation Center at the Institute of History, the Slovak Academy of Sciences,) 2010.
- Nižňanský, Eduard und Katarína Psicová. Die Politik des Antisemitismus und der Holocaust in der Slowakei (1938–1945). In: *ditto, Antisemitizmus a holokaust na Slovensku v dokumentoch nemeckej proveniencie 1938–1945/ Antisemitismus und Holocaust in der Slowakei in Dokumenten deutscher Provenienz von 1938 bis 1945*. Banská Bystrica: Múzeum Slovenského národného povstania. 2021. (ニジニャンスキー＝プシツォヴァ 「スロバキアにおける反ユダヤ政策とホロコースト (1938年～1945年)」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第4号, 2024年3月。)
- Nižňanský, Eduard und Katarína Psicová. Die Typologie des Feindbildes in der Propaganda des slowakischen Staates. 2022. (Revised version of „Die Darstellung des Antisemitismus in der Slowakei durch Karikaturen und Plakate“ (in: *ditto, Antisemitizmus a holokaust na Slovensku v dokumentoch nemeckej proveniencie 1938–1945/ Antisemitismus und Holocaust in der Slowakei in Dokumenten deutscher Provenienz von 1938 bis 1945*. Banská Bystrica: Múzeum Slovenského národného povstania. 2021. (ニジニャンスキー＝プシツォヴァ 「スロバキア国のプロパガンダにおける敵のイメージの諸類型」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第3号, 2023年12月。)
- Paulovičová, Nina. The Reception of the Holocaust in Post-communist Slovakia. In: *Bringing the Dark Past to Light. The Reception of the Holocaust in Post-Communist Europe*. Edited by John-Paul Hlinka *et al.* Lincoln/London: University of Nebraska Press, 2013, pp. 549–590.
- Rothkirchen, Livia. The Situation of the Jews in Slovakia between 1939 and 1945. In: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 7, 1998.
- Saage Richard. *Faschismustheorien. Eine Einführung*. München: Verlag C. H. Beck, 1981.
- Sniegón, Tomas. *Vanished History. The Holocaust in Czech and Slovak Historical Culture*. New York/Oxford: Berghahn Books, 2017.
- Suláček, Jozef. *Biele plášte: Tragické osudy židovských lekárov na Slovensku v období 2. svetovej vojny*. (White Coats: The Tragic Fate of Jewish Doctors in Slovakia during World War II.) Bratislava: Múzeum ŽK, 2005.
- Syring, Enrico. Intentionalisten und Strukturalisten. Von einem noch immer ausstehenden Dialog. In: *Der Schatten der Vergangenheit. Impulse zur Historisierung des Nationalsozialismus*. Edited by Uwe Backes *et*

- al. Frankfurt/Main: Ullstein, 1992, pp. 169–194.
- Szabo, Miloslav. “Clerical Facism”? Catholicism and the Far-Right in the Central European Context (1918–1945). *Historický časopis*, 67 (2018): 385–412.
- ditto. *Klérofašisti. Slovenskí kňazi a pokúšenie radikálnej politiky (1935–1945)* (Clerofascists. Slovak priests and the templation of radical politics.) Bratislava: Slovart, 2019.
- ditto. Zwischen Geschichtswissenschaft und Wissenschaft. Der Holocaust in der slowakischen Historiographie nach 1999. In: *Einsicht* 11, 2014, pp. 16–23.
- Štefánek, Anton. *Základy sociografie Slovenska*. (Foundations of the Sociography of Slovakia.) Bratislava 1944.
- Vrzgulová, Monika. *Deti holokaustu*. (Children of the Holocaust.) Bratislava: DSH, 2007.
- Tóth, Dezider (ed.). *The Tragedy of Slovak Jews: Proceedings of the International Symposium, Banská Bystrica, 25th to 27th March 1992*, Banská Bystrica: DATEI, 1992. (デジデル・トート編『スロバキアのホロコースト—悲劇の諸相—』(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第73巻第3号, 2026年3月。)
- Ward, James Mace. *Priest, Politician, Collaborator: Jozef Tiso and the Making of Fascist Slovakia*. Ithaca and London: Cornell University Press, 2013.
- Wörsching, Mathias. *Faschismustheorien. Überblick und Einführung*. Stuttgart: Schmetterling Verlag, 2020.

資料

- Degree on the Legal Status of Jews (Documents). In: *Judaica Slovaca Series*, Volume 132, Bratislava 2022. Published by the SNM - Museum of Jewish Culture (SNM: Slovenské národné múzeum - Múzeum židovskej kultúry). (「ユダヤ人の法的地位に関する 1941 年スロバキア共和国政令第 198 号」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第73巻第2号, 2025年11月。)

解題

翻訳の底本は、ハンガリーで刊行されている学術雑誌 *Fórum Társadalomtudományi Szemle / Forum Social Sciences Review* にハンガリー語で掲載される予定の論文の英語版 Eduard Nižňanský and Tamara Janecová, “Children of the Holocaust — the Case of Slovakia”である。著者 Eduard Nižňanský はスロバキア・コメニウス大学教養学部教授、Tamara Janecová はスロバキア・トルナヴァ大学文学部専任講師である。翻訳出版は、原執筆者の許諾による。() 内は原執筆者により、[] は訳者による。

一般にホロコースト研究に供されるデータは、加害者側の行政記録であると指摘する執筆者によれば、「加害者側が作成した文書（統計データ）は、行政目的の下僕であり、本質的に被害者を非人間化する。これに対して生存者の証言は、歴史の記録に主体性と個別具体性という魂を吹き込んでくれる。」本論文では、このような観点からミラン・シメチカ財団（スロバキア・ブラチスラバ）が収集収蔵しているオーラルヒストリー・データベース、執筆者による聞き取り調査などに基づいて、子ども時代にホロコーストの殉難者になった人たちの証言を取り上げ、渦中の子どもの目からホロコーストの実相に迫っている。

執筆者によれば、子どもの見たホロコーストに関するスロバキアにおける先行研究は、2007年に出版されたモニカ・ヴルズグロヴァ『ホロコーストの子どもたち』（英文）だけであり、研究は緒についたばかりのことである。

ここに訳出した著作とテーマが重なっている作品としては、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著（三浦みどり訳）『ボタンの穴から見た戦争』（岩波現代文庫、2016年）がある。これは、第二次世界対戦を経験したベラルーシの子どもたちの証言集である。ここに訳出した著作が、ローレンス・ランガーの著書『ホロコーストの証言—記憶の廃墟—』（1991年）で開陳した記憶類型論を基礎に記憶と事実との乖離に関する心理学の観点から、証言を分析している点では、『ボタンの穴から見た戦争』とは趣を異にする。

論文を訳しながら、帝政時代のロシアにおけるゼムストボ統計に農家一戸あたりの平均馬匹数が「4分の1頭」とあるのを、馬を持たない4戸に3戸の農家では、農夫が馬の代わりになっていることを見抜き、統計を「生きた数字」にしたウスペンスキーの故知を思い出した。研究を深めて、「行政目的の下僕」と言われる統計データを「生きた数字」にする今後の努力に期待したい。（2025年11月9日、訳者）